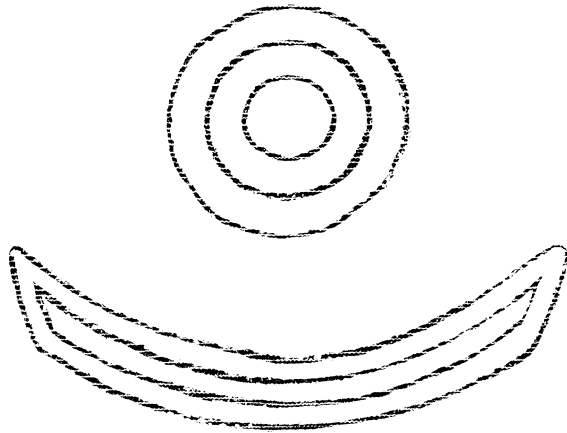


三重県鈴鹿市

伊勢国分寺跡 (5次)
長者屋敷遺跡 (1次)



1993.3

鈴鹿市教育委員会



伊勢国分寺跡 南浦5地区瓦出土状況 (SX07)



長者屋敷遺跡 礎石建物跡 (SB01)

序

鈴鹿市を代表する遺跡に伊勢国分寺跡と伊勢国庁跡があります。前者は僧寺が国史跡に指定され、これまでの調査でその四至が明らかにされました。しかし、もうひとつの国分寺である尼寺跡と大国である伊勢国の政治を司る国庁跡についてはその所在地が確定しておりません。市教育委員会では、文化庁および県教育委員会の指導を得て、昨年度より尼寺推定地を、今年度より伊勢国庁跡の有力な候補地である長者屋敷遺跡の発掘調査を開始しました。その結果、尼寺推定地からは寺院の築地跡が見つかり、寺域の推定が可能となりましたが、出土遺物は白鳳期の瓦のみで、国分寺前身の白鳳寺院(大鹿廃寺)と推定されます。また、長者屋敷遺跡からは、多量の瓦と共に基壇を有する礎石建物跡が発見され、伊勢国庁跡の可能性がますます高くなったと言えます。今後も地元の方のご理解と協力を得て、重要遺跡の範囲確認調査を実施して、一時も早く、史跡指定に向けての保存施策を講じていきたいと考えております。

今年度も調査指導委員会の先生方をはじめ、文化庁、県教育委員会、県埋蔵文化センターの方々のご指導を得たことに感謝申し上げます。

平成5年3月31日

鈴鹿市教育委員会

教育長 市川年夫

例 言

1. 本書は鈴鹿市国分町に所在する伊勢国分寺跡（第5次）及び同広瀬町に所在する長者屋敷跡（第1次）の発掘調査概要報告書である。現地調査は1992年9月7日～翌1月31日（実働66日）の期間を要した。

2. 調査箇所及び調査面積は次の通りである。なお、調査区名は字名を用いている。

	（調査区名）	（所在地）	（調査面積）
[伊勢国分寺跡]	南浦5地区（鈴鹿市国分町字南浦1395番地）		120㎡
	南浦6地区（鈴鹿市国分町字南浦1392番地）		80㎡
	谷上1地区（鈴鹿市国分町字谷上1457番地）		80㎡
[長者屋敷遺跡]	長塚1地区（鈴鹿市広瀬町字長塚1247, 1248番地）		110㎡
	南野1地区（鈴鹿市広瀬町字南野971番地）		115㎡
	荒子1地区（鈴鹿市広瀬町字荒子981番地）		110㎡

3. 発掘調査は1992年度国庫補助金及び県費補助金を得て、以下の調査体制で行った。

調査主体	鈴鹿市教育委員会（教育長市川年夫）
調査指導	八賀晋（三重大学人文学部教授）考古学 足利健亮（京都大学総合人間学部教授）歴史地理学 渡辺寛（皇學館大学文学部教授）古代史 高瀬要一（奈良国立文化財研究所）史跡整備 仲見秀雄（鈴鹿市文化財調査会会長）地方史 三重県教育委員会、三重県埋蔵文化財センター
調査担当	鈴鹿市教育委員会事務局文化財保護課 寺田悟（課長）、中森成行（係長）、浅尾悟（調査担当）、 森久弥（庶務担当）、 （室内整理）加城陽子、杉本恭子、浅野和歌子、石谷佳誉子、 （発掘作業）国分町、広瀬町の皆さん

4. 現地調査及び報告書作成にあたり、次の方々よりご指導及びご協力を戴いた。特に長者屋敷遺跡の調査に関しては村山邦彦氏の研究成果及び指導によるところが大きい。

松村恵司（文化庁）、谷本鋭次、服部久士（県教育委員会）、伊藤克幸（県埋蔵文化財センター）、村山邦彦（鈴鹿市役所）、大場範久（神戸高等学校）、加佐登小学校、

5. 遺構記号は下記の通りであり、番号は遺跡ごとに第1次調査からの連番である。

S B；建物跡、S A；柵列・築地、S D；溝、S F；焼土坑、S X；その他遺構、

6. 座標は国土座標第VI系、方位はすべて座標北を用いている。

7. 本調査に係る遺物及び図面、写真等は総て当教育委員会で保管している。

8. 現地調査及び本書の編集、執筆は浅尾が行った。遺構実測の一部には藤原秀樹、新田剛、森久弥、大西貴夫（三重大学生）の参加があった。

1. 発掘調査の概要

伊勢国分寺跡は鈴鹿市国分町地内に所在し、西に僧寺、東に尼寺が建立された。僧寺(字堂跡、西高木、西谷)は1922年(大正11)年に国史跡に指定され、指定地周辺は長く現状変更もなく保存されてきた。しかし、最近の急速な開発の波はこのどかな国分周辺にも押し寄せ、区画整理事業、廃棄物処理場建設などの開発が相次いだ他、指定地の僅か20m西には国道23号北勢バイパスの建設が予定されるなど、伊勢国分寺跡を取り巻く環境は決して予断を許さない切迫した状況下にある。また、尼寺跡に至っては指定すらされていない状況下であり、鈴鹿市教育委員会ではその危機感の認識のもと、伊勢国分寺跡の保存と史跡整備に向けての基本的資料を得るため、1988年度より寺域確認を主眼とした発掘調査を実施することになった次第である。

これまでの4次にわたる調査で、僧寺はその四至を明らかにし、東西178m、南北184mのほぼ正方形なる側溝を伴う築地跡を検出している。それは、指定域とほぼ一致していた。また、寺域外にも国分寺と同時期の四面庇の掘立柱建物跡や瓦を竈を転用した竪穴住居跡など数棟の住居跡が存在することが確認された。尼寺跡は僧寺の東方約450mに位置するが、現集落内の字北条の地(北院)と集落の南方の字南浦の地(南院)の2箇所に比定地があり、共に古瓦が出土する。第3次調査からはこの内、比較的調査の容易な南院跡に調査区を設定して尼寺跡の確認調査を実施してきた。第4次調査では堂塔など、寺院に直接結び付く遺構は検出できなかったものの、掘立柱建物跡や白鳳期に遡る瓦が多量に出土し、鈴鹿川流域では初の白鳳寺院の存在を確かなものにした。しかし、同時に国分寺期と思われる瓦も出土しているため、この寺院が白鳳寺院を尼寺に改修したものか、別個の寺院跡であるかは今後の課題となった。

長者屋敷遺跡は鈴鹿市広瀬町と亀山市能褒野町の一部にまたがる遺跡で、東西600m×南北800mの範囲に古瓦の散布が認められ、これまで伊勢国府跡あるいは鈴鹿軍団跡、寺院、郡衙、駅家などに比定されてきた。しかしその遺跡の性格の不明さとその広大な遺跡範囲から、これまで何ら史跡に指定されることもなく今日に至っている。この地は昭和の初め頃までは『武蔵野』を彷彿させる雑木林で被われていたが、戦時中は遺跡の西北部が陸軍航空隊の飛行場となり、土塁等遺構の一部が破壊された。戦後は開墾が進み、一部の雑木地を除いて殆ど畑地となった。1957年には藤岡謙二郎氏らによって一部発掘調査が実施された。しかし、考古学的な調査ではなく、国府推定地としての歴史地理学的な考察に重点が置かれたため、遺構や遺物の考察はなく、一部の研究者を除いてはそれほど重要視されなかったようである。しかし、遺跡を取り巻く環境は予断を許さず、遺跡の中央を東西に貫く県道添いに開発が進行している他、亀山市側に至っては何ら保護措置を講ずることなく、すべて工場用地となっている現状である。鈴鹿市教育委員会ではこの遺跡の重要性を地元の方々に周知すると共に、文化庁をはじめ、県教育委員会からの強い指導もあって、今年度よりようやく長者屋敷遺跡の範囲確認調査を実施することになった次第である。

II . 位置と歴史的環境

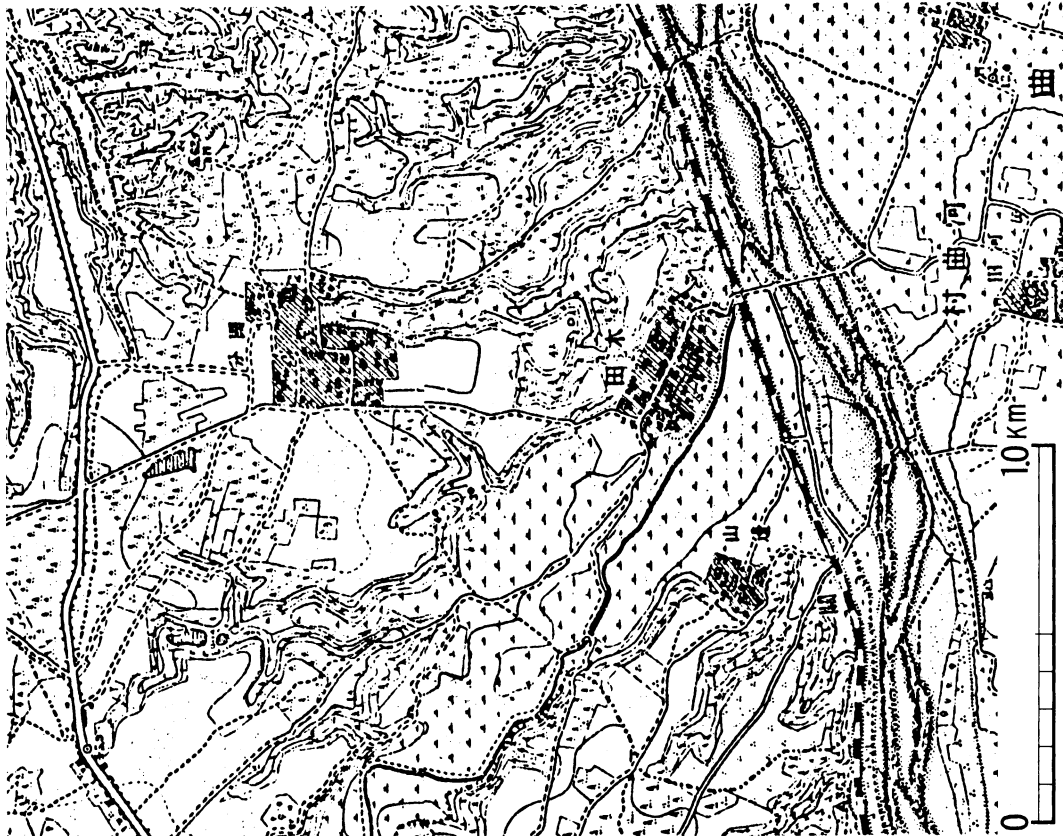
鈴鹿市は南北に長い三重県にあって、北部中央に位置し、北に四日市、南に安芸郡河芸町、西に亀山市と接している。旧郡名では河曲郡と鈴鹿郡、奄芸郡の一部から構成されている。1942年に市制を敷き、人口179,557人(1993年2月末日現在)、面積195.89㎦で、農水産業、工業共に三重県の中核都市となっている。地形的には北西部の鈴鹿山脈とそれに続く鈴鹿川北岸と南西部の高・中位段丘面、鈴鹿川下流域南東部の沖積平野に大別される。市域をほぼ東西に貫通する鈴鹿川は伊賀との境の鈴鹿郡関町加太に源を発し、亀山市、鈴鹿市、三重郡桶町を経て伊勢湾に注ぐ。鈴鹿川流域は畿内と東国を結ぶ重要な位置関係にあり、文化的にも東西文化の接点として特異な文化が展開したところとして知られている。

鈴鹿川流域には既に旧石器時代からの生活痕跡が各地で認められるが、弥生時代以降において遺跡数も格段に増加する。沖積平野自然堤防上に営なわれたこの地方最大級の遺跡**上箕田遺跡**^{かみだ}では遠賀川亜式土器が見つかり、前期後半にはこの地方でも稲作が開始されたものと考えられている。中期以降は北部の丘陵部にも集落は拡散し、**中尾山遺跡**(9)と**扇広遺跡**^{おぎひろ}(5)では多数の竪穴住居跡と方形周溝墓が発見されている。中期中葉以降の**大鼻遺跡**や**地蔵僧遺跡**(34)、**起A遺跡**(60)出土の弥生土器には近江系土器の一群があり注目される。また、後期後半から古墳時代初頭にかけては、**神戸中学校遺跡**(55)や**萱町遺跡**(56)、**須賀遺跡**(57)、**本多町遺跡**(58)など鈴鹿川南岸の自然堤防上に再び集落が立地する。鈴鹿川支流の御弊川左岸段丘上に位置する**地蔵僧遺跡**(34)では弥生時代中期中葉の方形周溝墓3基と後期後半から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡6棟が検出されている。

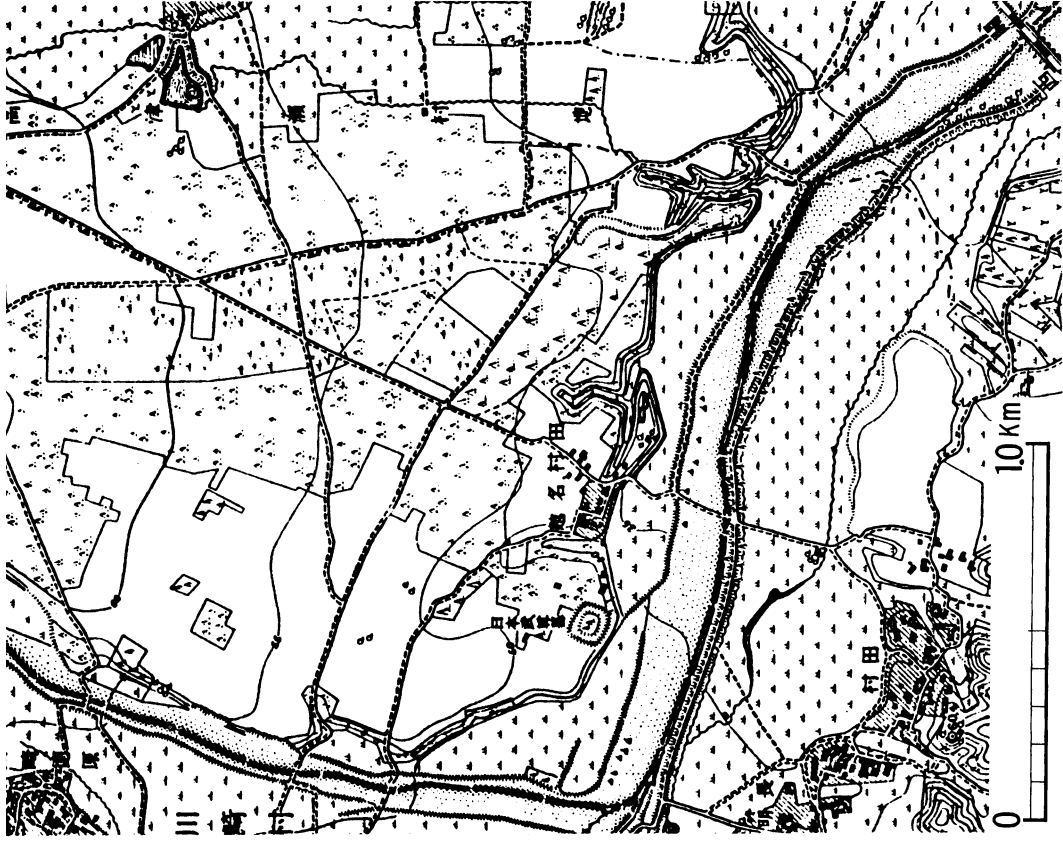
能褒野王塚古墳^{のほの}(36)は北勢地方最大最古の前方後円墳(全長90m)で、鈴鹿川流域では既に4世紀中頃までには強大な支配権が確立したことをよく物語っている。その他、全長70mの**寺田山1号墳**(7)も前期を代表する前方後円墳である。鈴鹿川流域では数多くの古墳が確認されているが、流域全体が系統だって築造されたわけではなく、いくつかのグループに分化して発展していったことが知られる。中でも鈴鹿川中流右岸の鈴鹿市国府地区と左岸の亀山市井田川地区一帯は鈴鹿川流域の中でも特に卓越した地区で、**上椎ノ木1号墳**(42)→**愛宕山1号墳**→**西ノ野5号墳**→**城山古墳**(40)→**西ノ野王塚古墳**(48)→**井尻古墳**(44)・**井田川茶白山古墳**(39)の首長墳の変遷をたどることができる。井田川茶白山古墳は1972年に発掘調査され、北勢地方最古の横穴式石室を内部構造に箱式石棺2基に画文帯神獸鏡2面を含む数々の副葬品が発見され、畿内との強い結び付きとこの地方の文化の高さをよく物語っている。この鈴鹿川流域は従来より古墳数に比して横穴式石室古墳の少なさを特色として指摘されてきた。しかし、それは横穴式石室が積極的に導入される6世紀後半の時期に古墳築造の絶対数が減少したことに起因するものと考えられ、この地域に限り群集墳が形成されていないことからそれを裏付ける。またそれは



第1図 遺跡位置図(1:50,000「鈴鹿(1:25,000)」「亀山(1:25,000)」国土地理院) (1:伊勢国分僧寺 2:伊勢国分尼寺 3:大鹿原寺 4:長者屋敷遺跡)



第2図 伊勢国分寺・長者屋敷遺跡付近地形図(1:20,000「神戸町」「川崎村」「川崎町」)



大日本帝国陸軍測量部 明治31年

方墳築造集団との関係の中で考察すべきなのかも知れない。従って比較的早い時期に築造された南山6号墳(13)、南町古墳(20)、正知浦1・2号墳、保子里18号墳(46)などは通常の円墳に横穴式石室を採用しているが、最終末に至っては蛸田古墳(11)、北野古墳(22)、深溝狐塚古墳(27)のように方墳に横穴式石室が採用される古墳が出現する。この時期の集落はよくわかっていない。大鼻遺跡の調査では64棟の竪穴住居跡が検出されているが、その他の遺跡の調査では4、5棟の住居跡の検出に留まっている。

飛鳥・白鳳期の寺院跡の所在地も明らかでない。本報告の大鹿^{おおか}麿寺(3)を除くと、岸岡天王屋敷遺跡、土師^{はせなんぼう}南方遺跡から古瓦が出土しているに過ぎない。天王屋敷遺跡出土の素弁八葉蓮華文軒丸瓦(第3図の3)は白鳳時代百濟様式末期の北勢地方最古の瓦であり、三重弧文軒平瓦(第3図の4)がセットをなす。土師南方遺跡出土の山田寺系軒丸瓦(第3図の5)は朝日町繩生麿寺出土瓦と同型である。壬申の乱ではこの地方が主要な舞台となる。鈴鹿関付近にて五百人の兵で山道を塞いだ大海人皇子一行は、「川曲の坂下」に至って日が暮れ、暫く休息した跡に「三重郡家」に向かった。「川曲の坂下」は国分寺付近と推定されるが、土地の郡司級の豪族・大鹿氏と何らかの協力関係がなされたものと考えられており、大鹿麿寺には川原寺式軒瓦が使用されている。

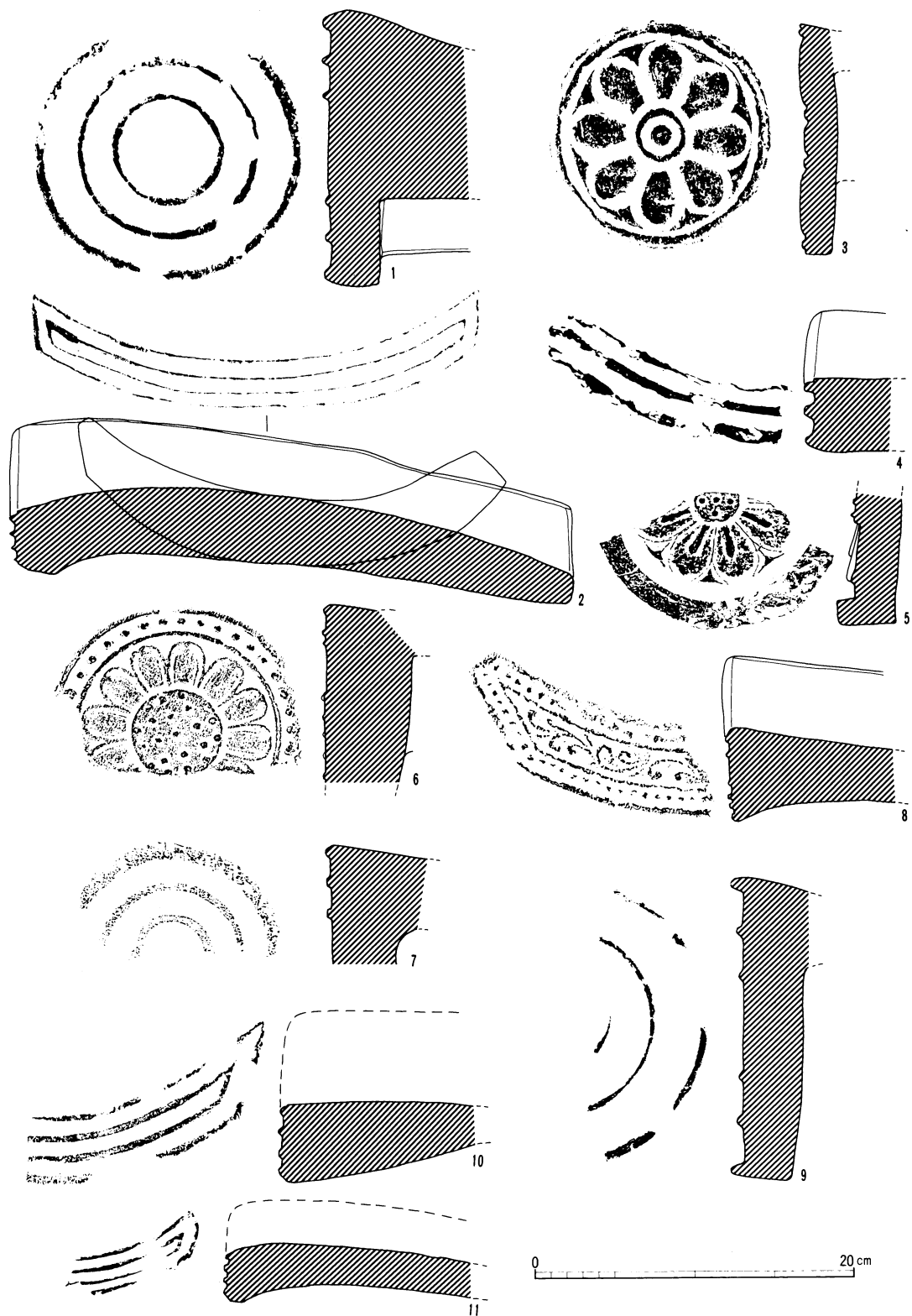
奈良時代には伊勢国の中心地として国府と国分寺が営なわれる。国府所在地は「和名抄」に「鈴鹿郡」あり、従来よりその地名から「長(庁)ノ城」を中心とした方八町域(50)に比定されてきた(第15図)。伊勢国分寺は僧寺(1)と尼寺(2)が河曲郡内にあり、尼寺所用の瓦のみ川原井瓦窯跡(23)で焼かれたことが判明している(第4図の12～17)。その他、八野^{はちの}釈迦堂遺跡も実体は不明ながら奈良寺院跡(八野麿寺)の可能性がある(第3図の6～8)。また、古道として鈴鹿関→長者屋敷遺跡(4)→伊勢国分寺→三重郡家(四日市市采女付近)と結ぶ鈴鹿川北岸ルートが東海古道と推定される。鈴鹿関跡の対岸にある古^{ふるまや}厩遺跡は駅家跡と推定されているが、ここから出土している重圈文軒丸瓦と重廓文軒平瓦(第3図の1・2)は長者屋敷遺跡出土の軒瓦(第16図の1～6)、八野麿寺出土の軒瓦(第3図の7)、伊勢国分僧寺跡出土の軒瓦(第3図の9～11)と形態的にも共通していることは4遺跡の性格を考える上で興味深い。



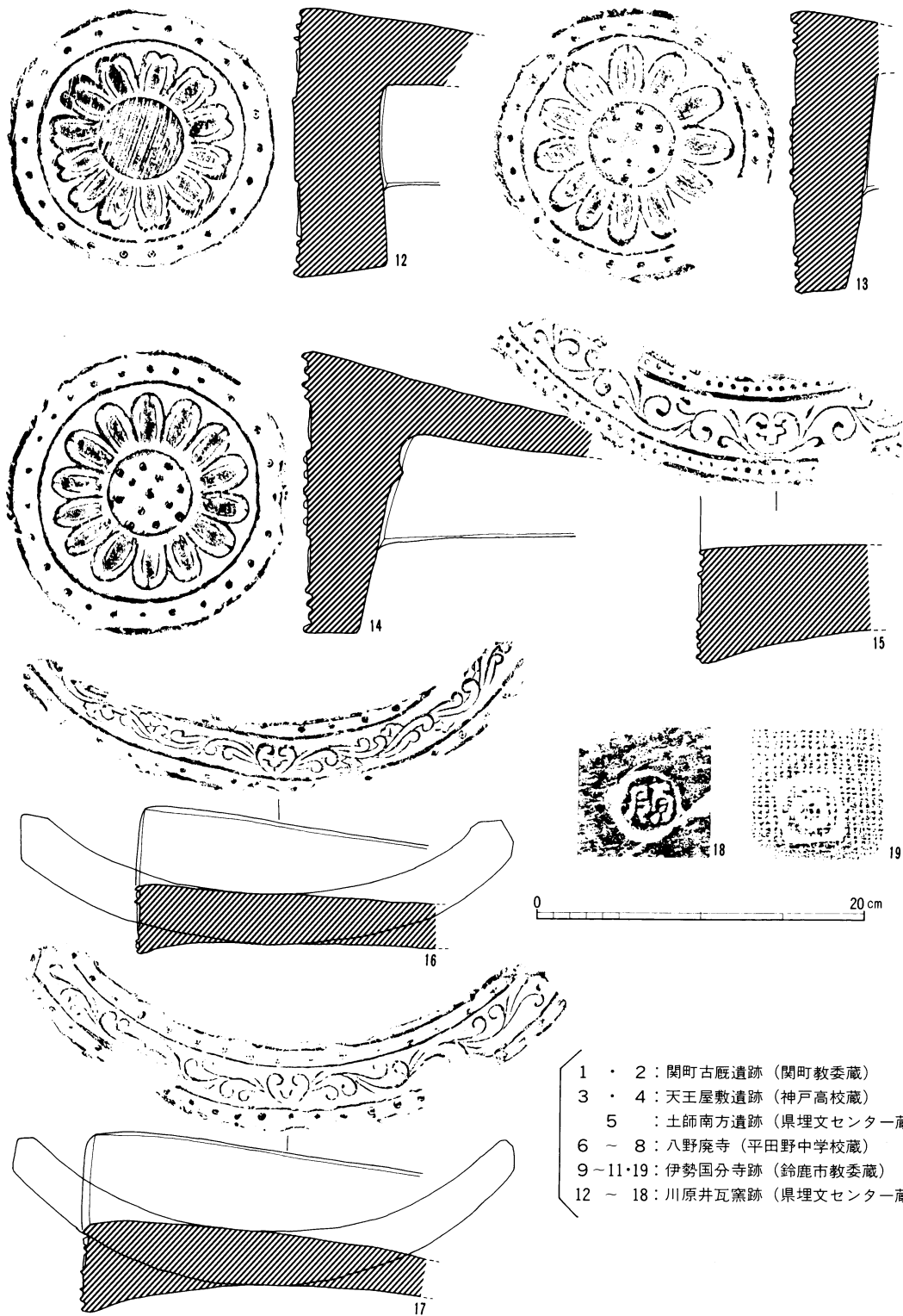
伊勢国分寺跡現地説明会



長者屋敷遺跡調査指導委員会



第3図 鈴鹿川流域出土古瓦実測図1 (1:4)



- 1 ・ 2：関町古厩遺跡（関町教委蔵）
- 3 ・ 4：天王屋敷遺跡（神戸高校蔵）
- 5：土師南方遺跡（県埋文センター蔵）
- 6 ～ 8：八野廃寺（平田野中学校蔵）
- 9～11・19：伊勢国分寺跡（鈴鹿市教委蔵）
- 12 ～ 18：川原井瓦窯跡（県埋文センター蔵）

第4図 鈴鹿川流域出土古瓦実測図2（1：4、ただし18、19は1：2）

Ⅲ．伊勢国分寺跡

1. 検出遺構

本年度は昨年度第4次調査において大量の瓦が出土した南院地区の南浦2・3地区の隣接地3箇所を設定して調査を進めた。

【南浦5地区】

南浦1地区の南に位置している。南浦1地区からは古墳時代後期の土坑1基、方向を同じくする鎌倉時代の溝5条などの遺構を検出している。基本的な層序は第Ⅰ層・青灰褐色粘質土(耕作土)、第Ⅱ層・暗褐色粘質土(中世包含層)、第Ⅲ層・黄褐色粘質土(古墳～平安時代包含層)、第Ⅳ層・砂利混入黄褐色粘質土(地山)で、地山上面まで北側で約40cm、南側で約60cmである。調査の結果、古墳1基、瓦集積遺構、溝2条を検出した。

SX07 調査区の中央部で検出された瓦集積遺構である。後述するように堆積場所は古墳周溝中にあり、平坦面から傾斜面への変換点に位置している。瓦は地表面から約30cmで検出され、約20cmの厚さで堆積しており、二次的に投棄された状態である。出土瓦は軒丸瓦25個体、軒平瓦28個体で、総て軒丸瓦Ⅱ型式、軒平瓦ⅠB型式である。特に軒丸瓦の瓦当面完形品が多く、出土量も多い。南浦2・3地区の調査で圧倒的に軒平瓦が多かったのとは対照的である。

SX08 横穴式石室を内部構造とする古墳である。大鹿山6号墳と命名する。墳丘は全く認められず、僅かに調査区の中央で弧を描く浅い溝(SD45)を検出し、周溝(幅約4m)と判断する。周溝から推定すると径1.5m程の円墳になるものと考えられる。内部構造は南に開口する横穴式石室で、主軸はN4°Wである。石室掘方は東西1.40m前後、南北8m以上の隅丸方形で、地山を掘り込んでいる。石室は基底部の一段のみ残存していたが、東壁部分は抜き取られている箇所が多い。石材は花崗岩あるいはホルンヘルス質で、俗に云う『御弊石』と呼ばれるものである。石室形態や規模等は抜き取り痕跡が明瞭なため、容易に推測することができる。袖石は両袖とも抜き取られていたが、立柱石と推測され、玄室と前室からなる複室式石室と考えられる。玄室は最大幅1.2m、長さ4.7mで、側壁は胴張りは見られず直線的である。前面に5～10cm程の小石を敷き詰めている。玄室の北半分には全く遺物は置かれておらず、南半分に須恵器杯身2個と蓋が9個、原位置を保って置かれていた。前室は最大幅0.95m、長さ2.1mで、南側開口部は底部が凹面になる。玄門部付近に土師器杯と須恵器平瓶、高杯が置かれていた。金環は玄室の埋土から出土した。

SD46・47 石室の東側で検出された南北溝2条である。SD46は幅1.2～1.4m、最大深度30cmで、断面U字形を成す。SD47は一方の肩が調査区外のため、幅は不明であるが、深さは35cm、両溝とも平行し、埋土も同じであるため、同時期と思われる、耕地整理(1955年前後)以前の比較的新しい溝であろう。

【南浦6地区】

昨年度調査区の南浦2地区の西隣に位置する。第Ⅰ層・青灰褐色砂質土層(耕作土)、第Ⅱ層・瓦混入明褐色粘質土の約30cm下で固い褐色粘質土層にあたる。遺物は全く含まれていないが、整地層と判断してさらに掘り下げると約40cmで黄褐色粘質土層(地山)となる。また、調査区の東端で幅80cmほどの礎石の残欠と思われる石を発見した。

SX09 発掘区の東端で、第Ⅱ層中に検出された瓦集積遺構である。東西幅1.3m、南北幅2.8m以上の不整形の形状を成し、集積は大きく3つのブロックからなる。集積の厚みは約10cmと薄く、瓦は比較的小さいものを主体とする。二次的に投棄された状況であり、隣接の南浦2地区のSX03・04と同種のものであろう。

SD48 発掘区の西方で検出された南北溝で、幅1.3m、深さは検出面より約20cmを測る。比較的新しい溝と考えられ、方向的にSD46とつながる可能性がある。

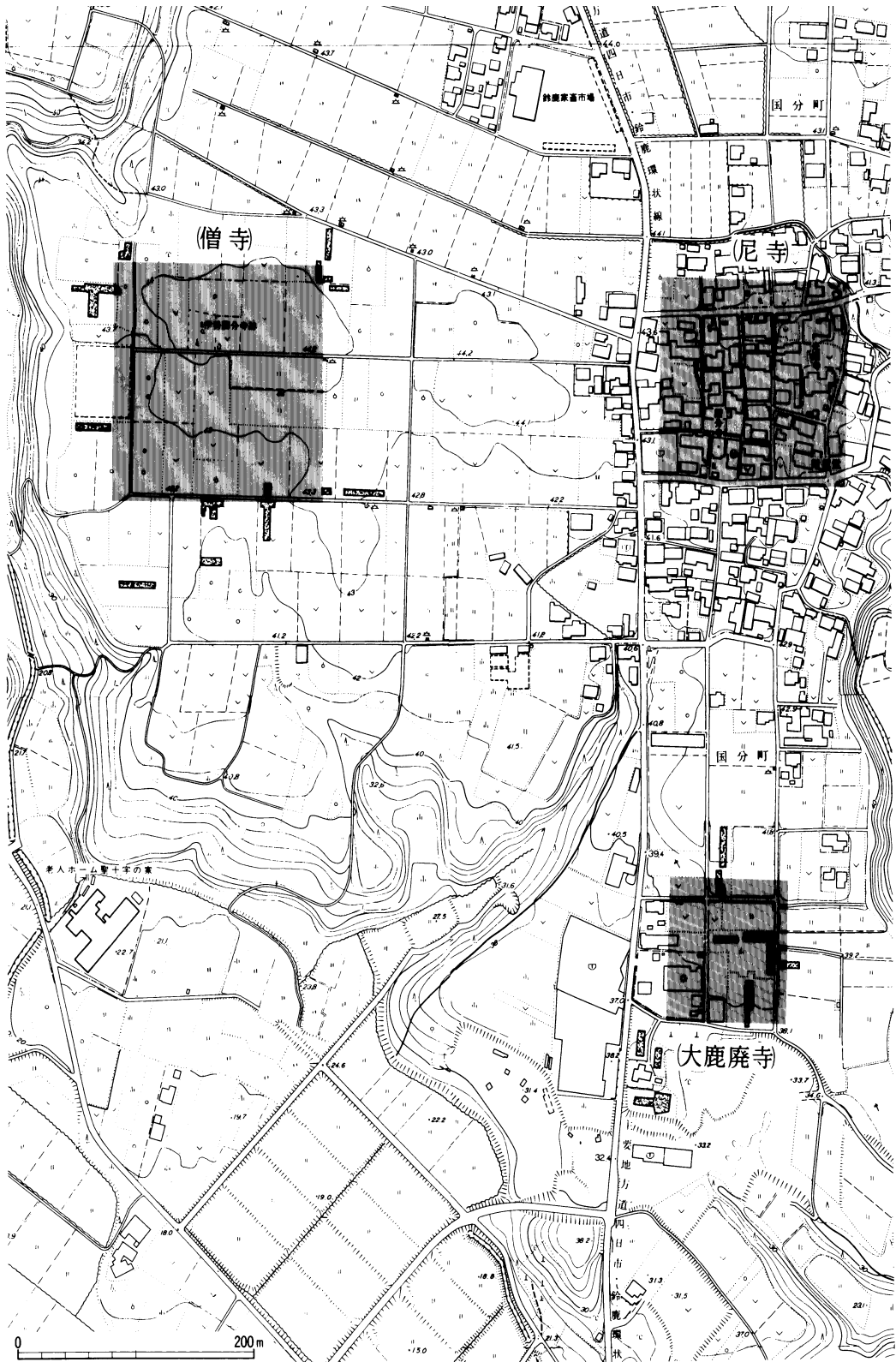
SD49 発掘区の西端で検出された東西溝で、さらに西に続く。幅60～80cm、深さは検出面より35cm測る。溝内はほぼ瓦小片と小石で満たされており、暗渠排水溝であろう。

【谷上1地区】

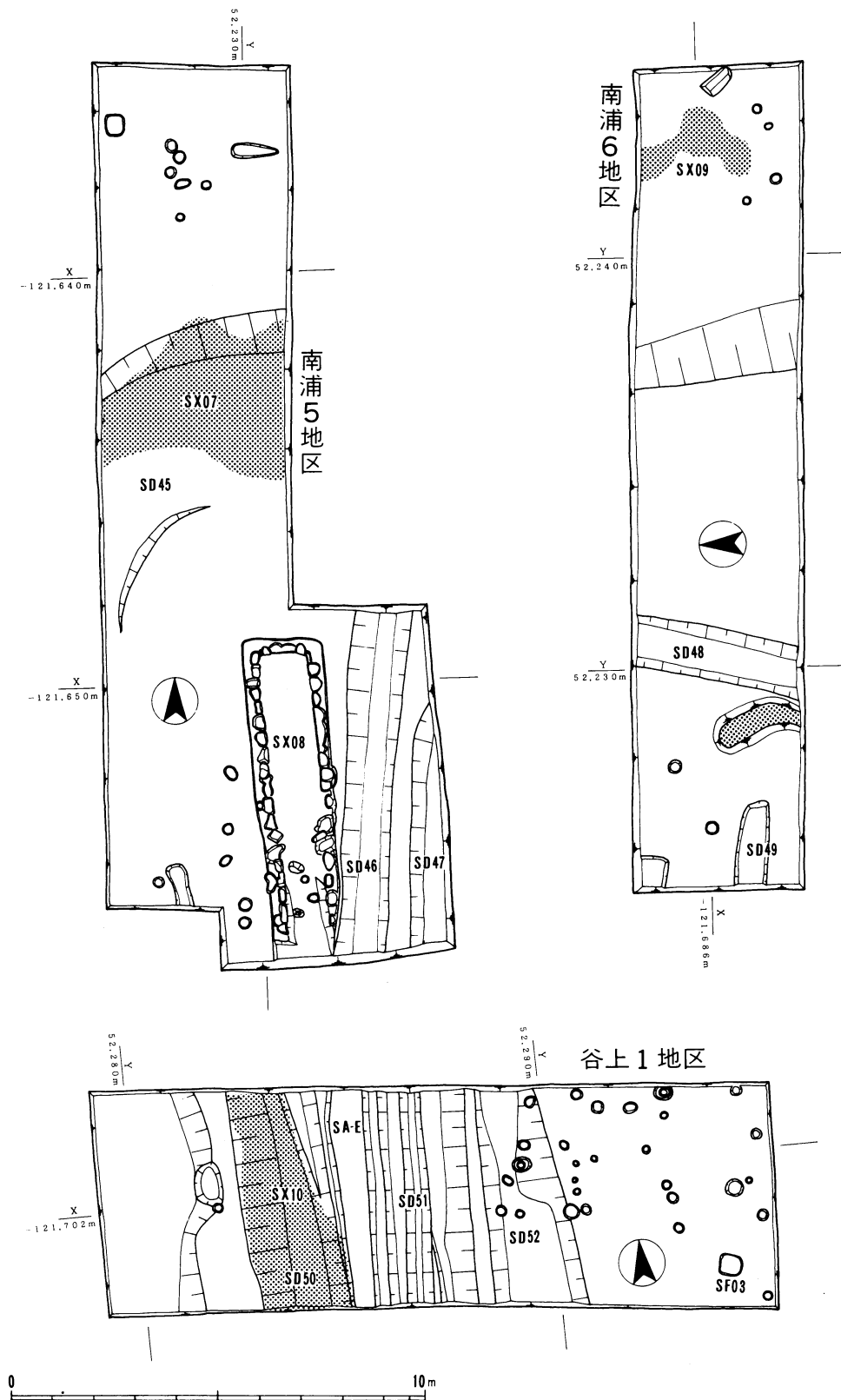
昨年度の南浦3地区で多量の瓦出土及び掘立柱建物跡を検出したので、その広がりの有無を確認する目的で、道路を隔ててその東側隣接地に調査区を設定した。調査前の状況は水田地で、青灰褐色粘質土(耕作土)及び濃褐色粘質土(床土)の直下は黄褐色粘質土(地山)である。調査の結果、寺院の築地跡とその両脇の溝、瓦集積遺構、焼土坑、ピットを検出した。

SA-E、SD50・51 築地跡とその両側の溝である。築地跡は上端で幅50～80cm、下端で幅2.2～2.6m、上面はやや湾曲し、両側には10～20cm幅の犬走りを有している。方向はほぼ真北方向で、東側は若干のピットは見られるものの、地盤は安定しており、瓦等の遺物が極端に少ないことから、この築地跡は寺院の東を区切るものと推定される。築地東西のSD50・51は共に幅約2.5m、深さは検出面より約40cmを計測する。SD50の上層にはかなりの量の瓦(細片)と小石が混入しており(**SX10**)、遺物は平安時代中期から江戸時代前期のものを含む。

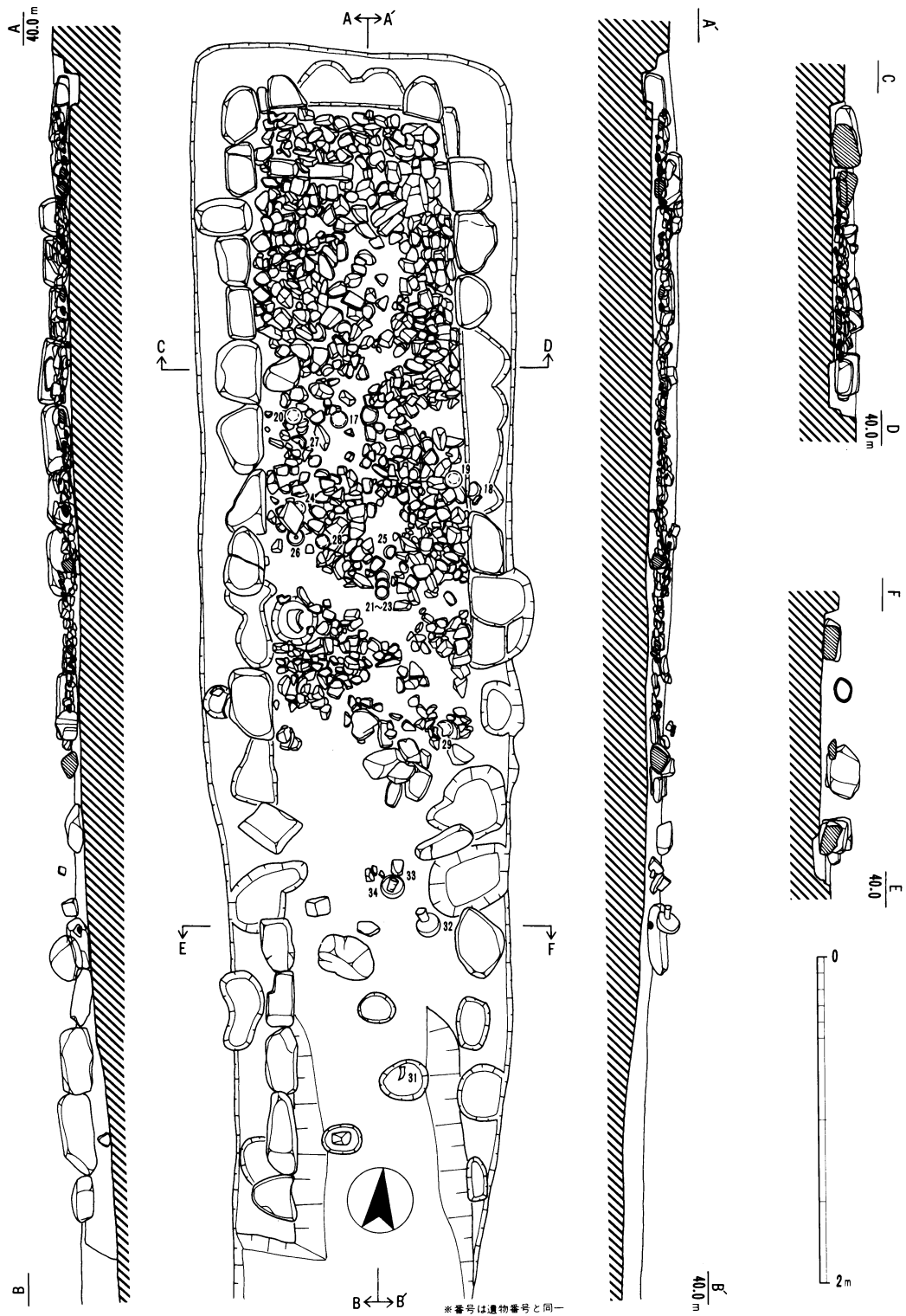
SF03 調査区の東南隅で検出した焼土坑である。南北50cm、東西55cmの隅丸方形を呈しており、壁面は総て厚さ約1cm程の炭で被われ、内部は赤く焼けた焼土で被われていた。深さは検出面より僅かに5cmの残存であった。これとほぼ同類の焼土坑が、南浦3地区及び西高木2地区でも発見されており、幼児の火葬墓と推定される。



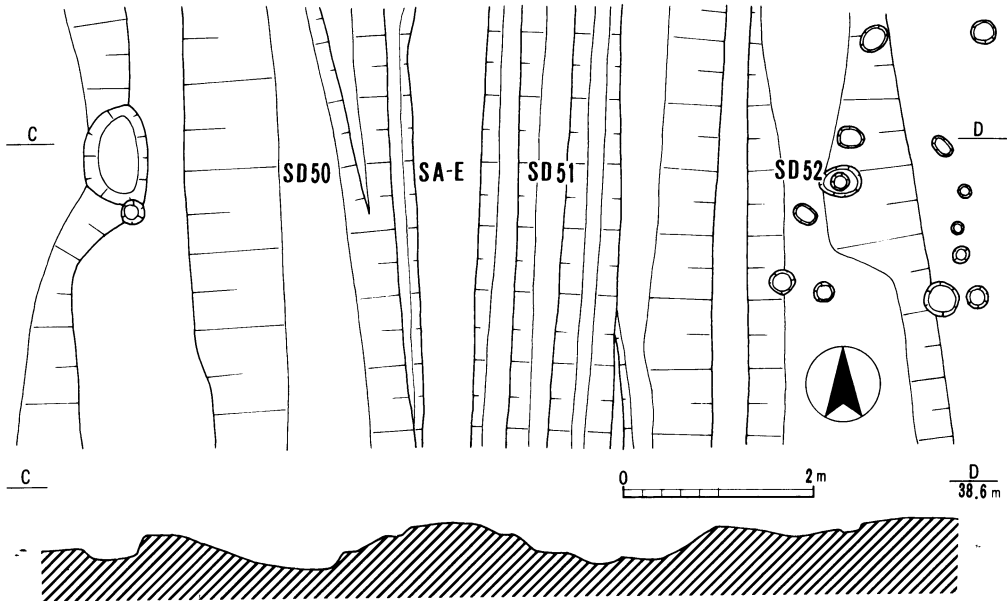
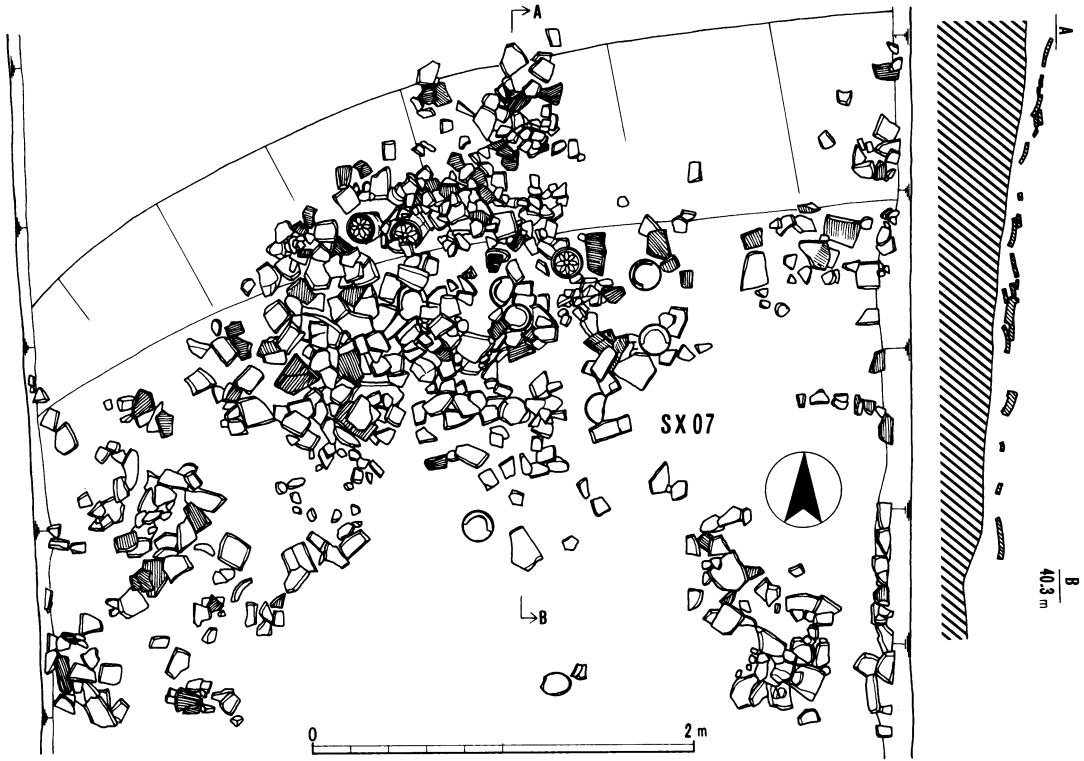
第5図 伊勢国分寺跡3寺院位置関係図 (1:5,000)



第7図 遺構全体実測図 (1 : 160)



第8図 大鹿山6号墳石室実測図 (1:40)



第9図 SX07 (1 : 40)、SA-E・SD50~52 (1 : 80) 遺構実測図

2. 出土遺物

出土遺物は石室内遺物を除くとそのほとんどが瓦類で、土嚢袋にして約80袋である。土器類の出土は極めて少ない。

①瓦類(図版10～12)

すべて軒瓦を含む丸瓦と平瓦で、道具瓦等は確認されていない。SX07・09・10の遺構からの出土が大半で、表土、包含層からの出土は少ない。軒瓦の型式、地区別出土数は次の通りである。

型式 地区	軒丸瓦		軒平瓦		
	Ⅱ	Ⅷ	ⅠBa	ⅠBb	ⅠB(a, b不明)
南浦5地区	25		1	18	11
南浦6地区	1	1	1	6	4
谷上	4		3	3	2
計	30	1	5	27	17

※軒瓦型式は「伊勢国分寺跡第3次発掘調査概要報告」(1991)による

軒丸瓦

Ⅱ型式(1～3) 重圏縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。有子葉の蓮弁は先が尖り、間弁は平面的で、中房は径3.0cm、蓮子は1+8個を数える。外区は素文縁で内区との間に一重の圏線を有する。面径15.8cm、胎土は1～3mmの砂粒を少量含み、青灰色を呈する。

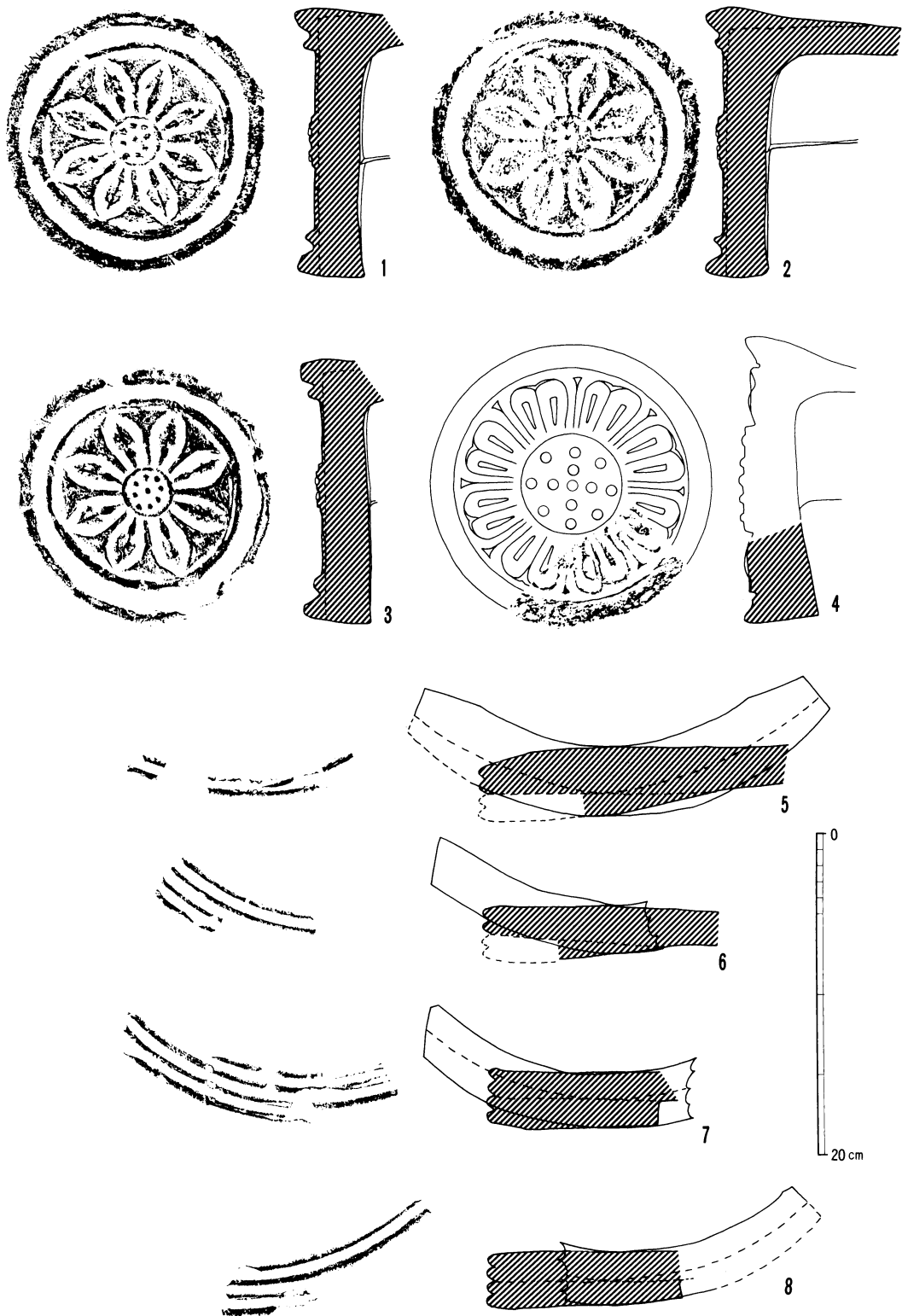
Ⅷ型式(4) 複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、外区には鋸歯文はないが、いわゆる川原寺式軒丸瓦の一群に属するものである。今次での出土は細片の1点のみである。これまでの出土例から、面径17.5cm前後、中房径6.3cmで蓮子数は1+4+8個である。緻密な胎土で、淡赤褐色を呈する。

軒平瓦

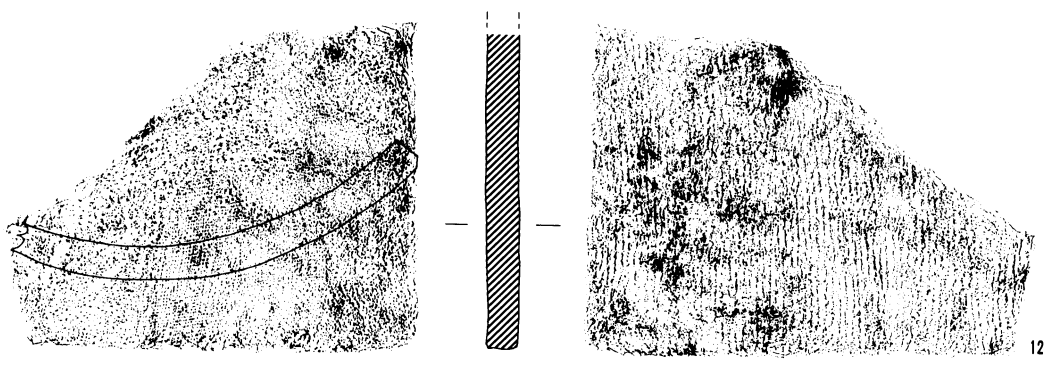
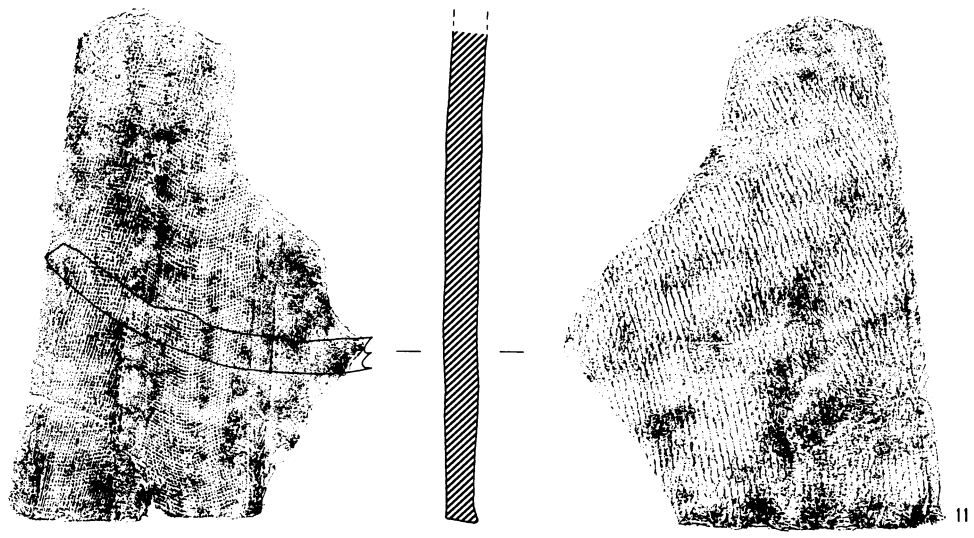
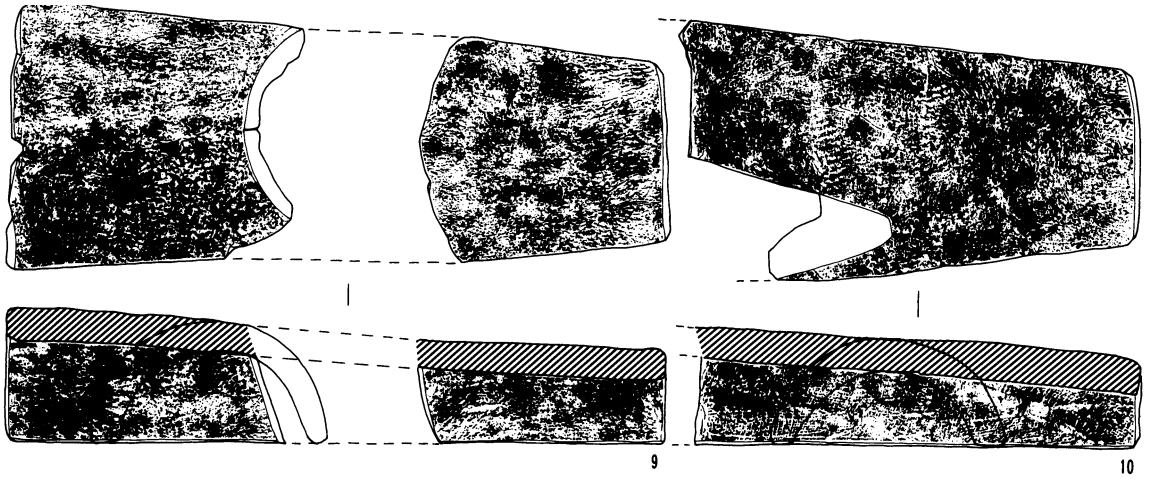
ⅠB型式(5～8) 四重弧文軒平瓦で、顎の有無によりⅠBa型式(無顎)とⅠBb型式(有顎)に細分する。ⅠBa型式(5,6)は、弧文の2段目と3段目の間で継ぎ合わせている。凹面は前面にヘラ削り成形、側面、前面の3面に幅の広い面取りを施すのがⅠBa型式の特徴である。ⅠBb型式(7,8)の顎幅は一定ではなく、10～12cmの幅が最も多い。凹面は原則として布目痕のみで、僅かに3隅に幅の狭い面取りを施す。凸面は平瓦A種手法を用いている。胎土は1～2mmの砂粒を少量含み、須恵質焼成が多く、青灰色を呈する。

丸瓦 9、10; SX07

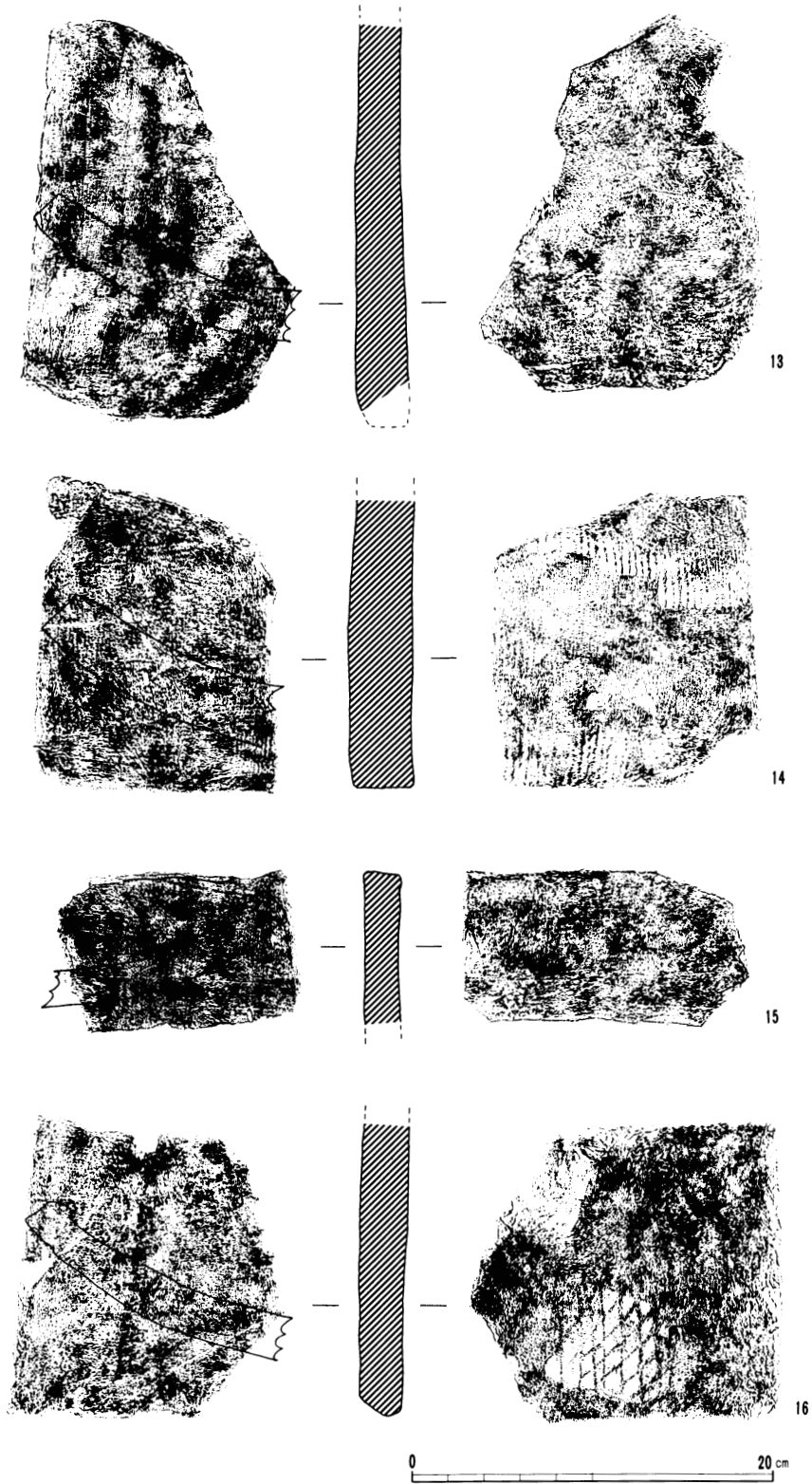
今次調査区からはすべてA種(行基葺式丸瓦)のみが出土し、B種(玉縁式丸瓦)は1点も確認されていない。今次出土の丸瓦でも全形を計測できるものは出土しなかったが、9の2点は同一の製品と推定され、全長35cm前後、最大幅14.5cm、最小幅9.5cm、高



第10図 軒瓦実測図 (1 : 4)



第11図 丸瓦・平瓦実測図 (1 : 4)



第12図 平瓦実測図（1：4）

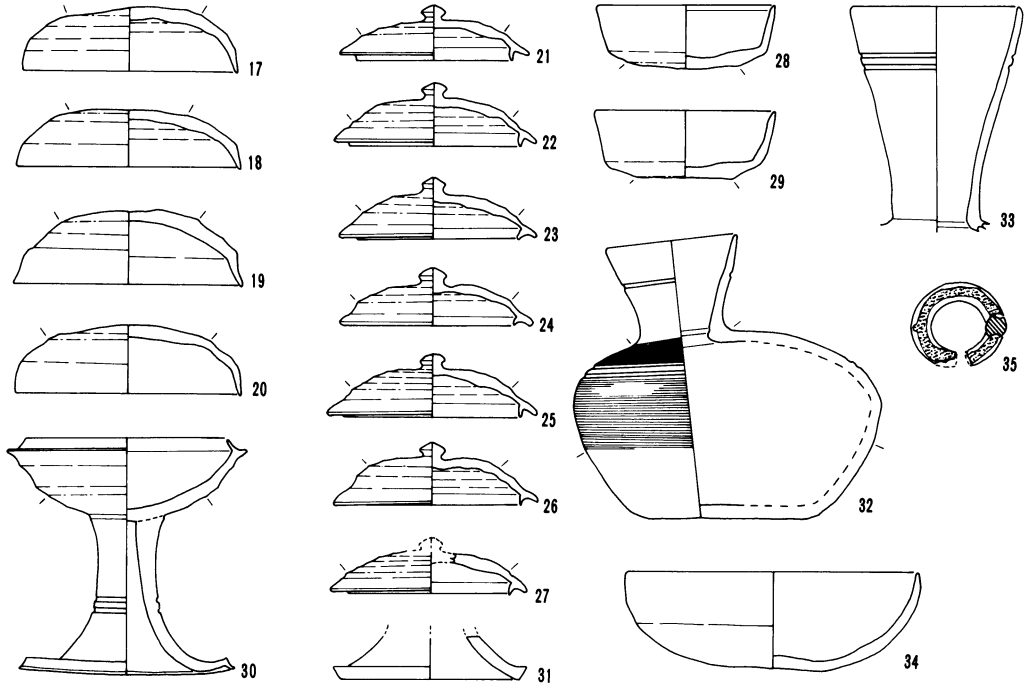
さ5.0～7.1cmを計測する。凸面は縄目タタキの後、丁寧にナデ消され、凹面は布痕のままである。1～2mmの砂粒を少量含み、灰白色を呈する。

平瓦 11～16; SX07

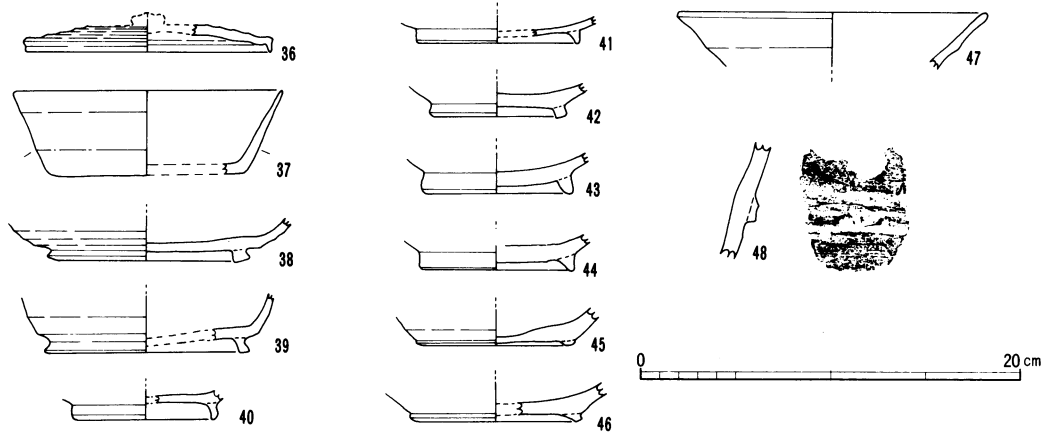
前回同様、調整技法によりA～G種に分類する。ただし、今次調査ではC種平瓦は確認されていない。

A種 (11) 出土平瓦の過半数はこのA種平瓦である。凹面は糸切りの後、布目痕、側縁に添ったヘラ削りを疎らに施す。端部は4隅共、浅い面取りを施す。凸面は側縁に対して

大鹿山6号墳石室



その他地区



第13図 出土土器実測図 (1 : 4)

斜め縄目タタキ成形。11は模骨痕が明瞭で、胎土は1～3mmの砂粒を少量含み、灰白色を呈する。

B種(12) 出土数は少ない。凹面は糸切り痕の後、布目痕のみで、他の調整は施さない。凸面は側縁に平行縄目タタキ成形。胎土は1～2mm砂粒が多く、赤褐色を呈する。

D種(13) 凹面は布目痕の痕、側縁方向に添ってヘラ削りまたはナデ消し成形を施す。端部の4面には浅い面取りを施す。凸面は縄目タタキの後、ヘラ削りまたはナデによって擦り消されている。良好な焼成で灰白色を呈する。

E種(14) 凹面は布目痕のみで、端部は原則として面取りを施さない。凸面は大きめの縄目タタキ成形で、一部ナデ消されている。やや厚手で、良好な焼成、白褐色を呈する。

F種(15) 凹面は布目痕のみ、凸面はタタキが全く見られない程、丁寧なヘラ削り成形を施す。胎土は1～3mm砂粒を少量含み、青灰色を呈する。

G種(16) 凹面は布目痕、凸面は斜格子目あるいは正格子目タタキ成形。焼成はややあまく、黒灰色を呈する。出土例は極めて少ない。

②土器類(図版13)

〈大鹿山6号墳石室内出土遺物〉

須恵器杯蓋(17～27) 2型式に分類できる。蓋A類(17～19)は外面上部は未調整、体部には既に稜を留めず、丸く湾曲する。端部は細く丸くおさまるが、19はやや外反する。口径115～120mm、器高31～40mmで、胎土は0.5～2mmの砂粒を少量含み、黒灰色を呈する。蓋B類(21～27)は断面が菱形の宝珠つまみを有する蓋で、口径83～90mm、器高30～33mmを計測する。天井部は約2/3がヘラ削り成形で、かえりは大きく、口縁端部よりも下方にのびている。胎土は0.5～1mmの砂粒を含み、青灰色を呈する。

須恵器杯身(28・29) 口径93mm前後、器高35mmで、底部は回転ヘラ切り未調整のまま、体部から口縁にかけては直線的に立ち上がり、端部は細く終わる。焼成は良好で、淡青灰色を呈する。

須恵器高杯(30・31) 30は口径106mm、底径110～112mm、器高123mmで、脚部中央には2条の沈線を有する。杯部は底部ヘラ削り成形、受部は細く、端部は内傾して細く終わる。31は底径92mmで、透かしを有する。胎土は1mmの砂粒を少量含み、青灰色を呈する。

須恵器平瓶(32) 口径67mm、体部径160mm、器高150mmで、口縁部は中央部に1条の沈線を有し、直線的に立ち上がり、上方に細く終わる。体部は丸く、1/2上方がカキ目、下方から底部にかけてヘラ削り成形による。胎土は1～3mmの長石粒を少量含み、青灰色を呈する。

須恵器長頸壺(33) 口縁部のみの出土で、口径86mm、上方に2条の沈線を有する。下

方から直線的に立ち上がり、やや開きぎみで端部は細く終わる。焼成は良好で、灰色を呈する。

土師器杯(34) 土師器はこの1点のみの出土である。口径152～154mm、器高52mmを測り、底部から口縁部にかけては湾曲し、端部は上方に細く終わる。緻密な胎土で赤肌色を呈する。

耳環(35) 径6mmの銅地金の上に金を張っている。両側とも一部、金部分が破損している。径23×24mmで、断面は楕円形を呈している。

<その他> 36～38；南浦5、39；SD48、40；SX09、41～47；SX10、48；南浦6

須恵器杯(36～39) 36は宝珠つまみを有する蓋で、推定口径128mm、体部は粘土巻き上げ痕が明瞭で、端部は下方に細く終わる。37は推定口径140mm、体部にかけて「く」の字に屈曲し、直線的に立ち上がりそのまま細く終わる。内面は朱墨が付着していることから、転用硯と考えられる。38、39は高台付きの杯身で、共に口縁部を欠くが、38は体部がやや開く。胎土は1～2mm砂粒を少量含み、灰白色を呈する。

灰釉碗(40、41) 40は高台径70mm、逆三角形高台を有し、底部は糸切りの後、丁寧にナデ消されている。41は推定高台径102mm、高台端部は細く、器壁も薄い。共に緻密な胎土で、灰白色を呈する。

山茶碗(42～47) 色々なタイプの山茶碗が見られるが、大別して、高台の高いタイプ(42～44)と低いタイプ(45、46)がある。43と44は底部糸切りの後、ナデ消している。46は重ね焼き痕が明瞭である。胎土は0.5～2mm砂粒を少量含み、灰白色を呈する。

円筒埴輪(48) 細片であるが、タガ幅は1.6mmで、上部凹面の台形状を呈し、他はヨコ刷毛成形。僧寺からこの周辺にかけて、疎らではあるが、埴輪片を表採できる。

IV. 長者屋敷遺跡

1. 研究史と遺跡の概観

長者屋敷遺跡は鈴鹿市の中央西端、行政的には鈴鹿市広瀬町字南野、長塚、仲井、西野々、仲土居、荒子、仲起及び亀山市能褒野町に所在し、古瓦の散布範囲から東西600m×南北800mの遺跡範囲が推定されている(第18図)。地形的には鈴鹿川中流北岸の鈴鹿山脈から東に続く高位段丘面(旧扇状地)に位置し、遺跡のすぐ南側は鈴鹿川によって削り取られた崖(比高差約15m)になっている。伊勢国分寺からは西南西約7kmに、鈴鹿関推定地からは東北東約10kmに位置し、3遺跡はほぼ一直線で結ばれる。

長者屋敷遺跡に関する記述としては「三國地志」(宝暦13年刊)が初見で、

『……^{やおろし}箭卸長者宅址、按津賀村ニアリ域内廣大ニシテ敗瓦地布ク尤所由あるへし』

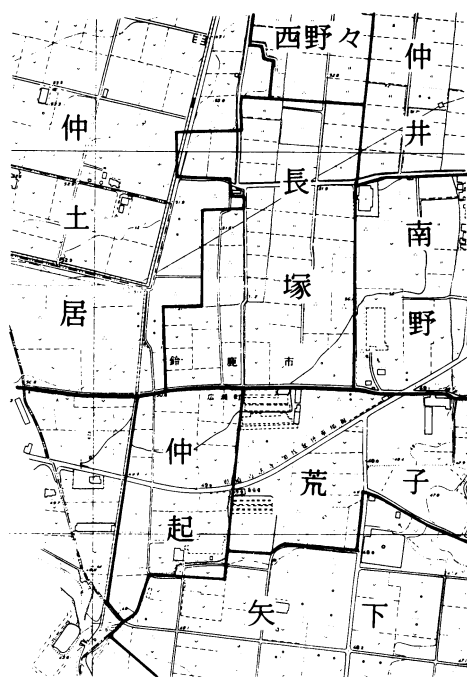
とある。また、「勢陽五鈴遺響」(天保4年刊)には、

『……矢オロシ長者宅地ノ址長者屋舗ト云アリ四面ニ封疆ノ威儀遺レリ土中ヨリ古瓦往々掘出ス満地ニ布テアリト云方俗伝テハ幡太郎義家陸奥国前九年軍役に此長者ノ家ニ一宿スト云ヘリ……』

とあり、江戸中期頃までに古瓦の散布がいわゆる長者伝説と結びついて伝承されてきたことが知られる。長者伝説は遺跡の北の「金藪」地区と南の「矢下」地区にあり、「高津瀬村誌」(明治40年刊)には下記の記述が見られる。

『金藪 本村ノ仲土居ニアリ古ハ木原長塚と云フ、周囲ヲ廻ラス長者ノ庭と云ヒ傳フ、傳ヘテ云フ古昔長者ノ亡ブルヤ金ヲ此ニ埋メ置キシ若シ廣瀬村(ヒヘイ)ニ陥ルトキハ、之ヲ掘レト、其地ヲ見ルニ小高キ所ニ大石ノ横ハルヲ見ルイフ其大石ノ下ニアリト反別一反六畝廿二歩』

『矢下 本村ノ西南矢下ニアリ、往昔郡山ノ長者ノ爰ニ至リ矢ヲ数多荷ヲロセシニヨリ其名起ルト』



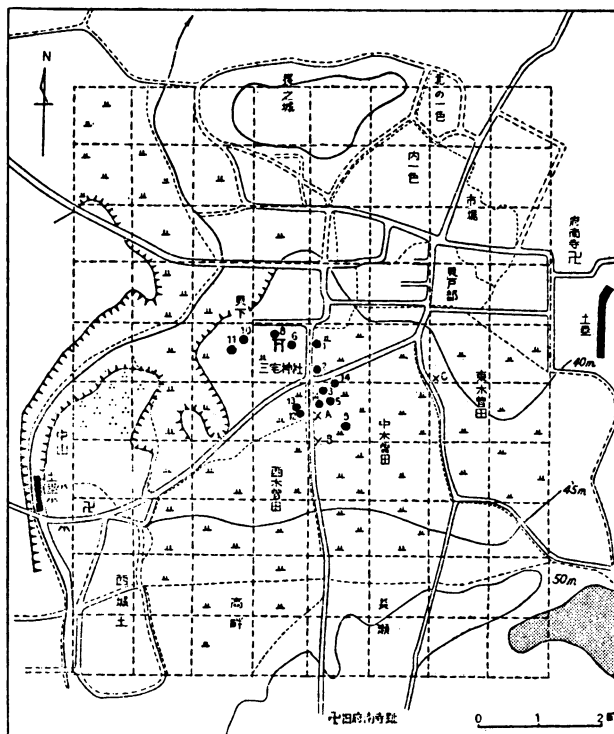
第14図 長者屋敷遺跡付近小字図

戦前からこの遺跡を歴史・考古学の対象として注目していた郷土史家もいた。鈴木敏雄氏は「三重縣古瓦図録」(1933年)の中で、

『……現時ニアリテハ津賀字南畑、俚稱新田と稱スル所ニ横五十米、縦七十一米ノ長方形ノ山林ニ、周囲ニ土居址及複雑ナル土壇ヲ有スル地アリ。山林内及附近ヨリ一帯古瓦ヲ出ス。之ヨリ東北百米余ノ地ニハ横二十四米、縦五十一米、ノ長方形山林内ニ土居址ト土壇ヲ残存セル地アリ。多ク瓦片ヲ出ス。コノ南ノ小谷ノ山林内ニハ無数ノ瓦片アリ里人ノ談ニ附近ノ田畑ヨリ捨ツル所ナリト云フ。又広瀬字長塚ニハ土居ノ址格子状ニ存シ其一区ハ里人ノ談ニ何レモ約八反歩程アリト。ソノ最明瞭ナルハ同地鈴木亀吉氏(一二六八ノ一番地)裏ノモノニシテ土居内ニハ北方ニ近ク小形ノ土壇址三個ヲ存スルコト古代ノ寺院址ノ感アリ。然レドモ其土壇址ハ、其一ハ十五.五米平方、其二ハ約九米平方、其三ハ約十米平方ニテ、而モ三趾甚シク接近セリ。古瓦ハ何レモ其附近ヨリ多量ニ出ス。果シテ邸宅址ナルカ、或ハ小寺院址ナルカ、……古瓦ヲ出ス所約八町四方アリ。……重圈疏瓦時ニ出デ、又唐草紋様ノ華瓦ヲモ時ニ見ルト。平瓦蓆紋アル面ノ一隅ニ刻印アルモノ相當ニ発見セララル。「人」「手」「宿」其他ニ三種アリ。……』

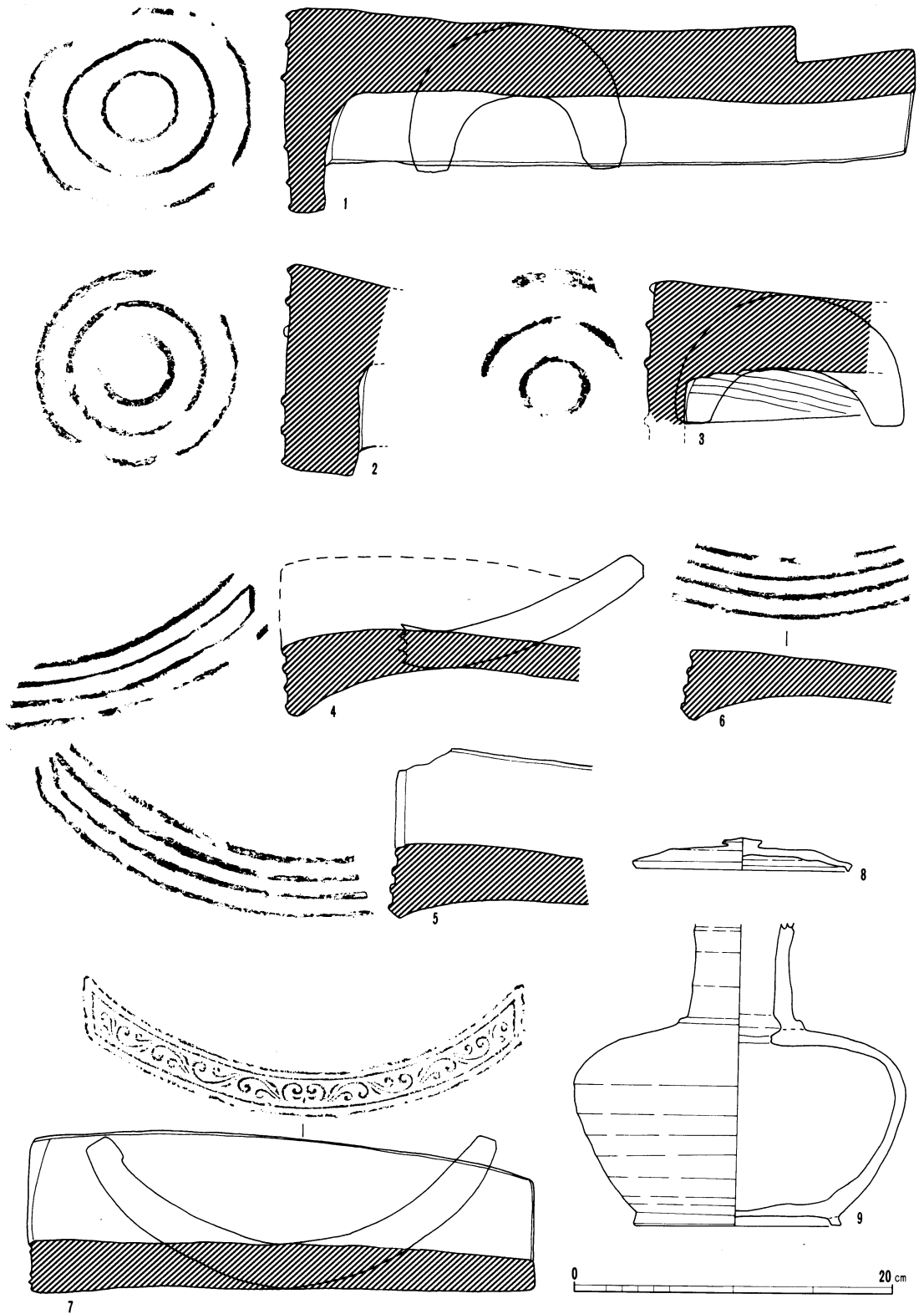
と記述しており、八町四方にわたって古瓦が散布し、各地に土居と土壇が残存していた様子が伺える。戦前から戦後にかけては前述したように、軍事施設の建設と開墾により各地に残存していた土居と土壇はほとんど消滅した。

1956年、歴史地理学の立場から京都大学教授(当時)・藤岡謙二郎氏らは国府研究の一環として鈴鹿市国府町地内の伊勢国府推定地の発掘調査を含む現地調査を行った。結果は国府跡に比定できるだけの確証を得ることができなかったが、その際、鈴鹿川を挟んだ対岸の広瀬町に広大に古瓦が散布する長者屋敷遺跡の存在を知った。早々、翌1957年に一部発掘調査を実施した。A地点とB地点(第18図)を調査したが正式に調査したのはA地点のみである(A地点と南野1地区は同一箇所)。A地点からは3間×7間の礎石建物跡を検出した他(第24図)、



第15図 伊勢国府プラン想定図

(藤岡謙二郎「都市と交通路の歴史地理学的研究」より)

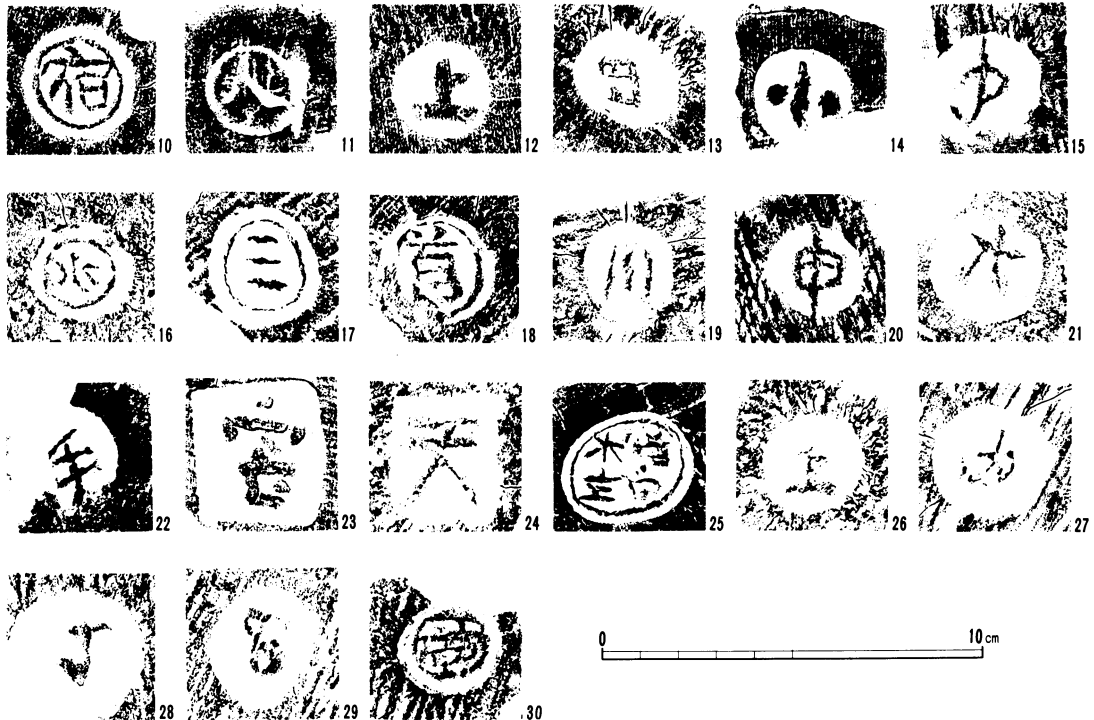


第16図 長者屋敷遺跡出土(表採)軒瓦・土器実測図(1:4)

(1・4・7・9; 神戸高校、2; 加佐登小学校
3; 田中安一氏、その他; 市教育委員会蔵)

B地点の切り崩し箇所からは難波宮系の重圏文軒丸瓦と重廓文軒平瓦及び平城宮出土と同範(6719A型式)の均整唐草文軒平瓦が出土した。なお、重圏文軒丸瓦及び重廓文軒平瓦はC地点からも出土しているが、全体として軒瓦の出土(表採)は極めて少ない。氏はかつて存在した土居等から方6町の遺跡プランを想定し、遺跡の性格として国府、郡衙、軍団跡が考えられるとしたが、中でも方形の土塁廓プランの存在等から軍団跡の可能性が高いことを示唆した。

この遺跡で特筆すべきは押印瓦の出土である。殆どが平瓦、丸瓦の凸面に陽刻のスタンプによって押印されている。発見された文字は、「宿」「人」「上」「巴(左文字)」「小」「中?」「水」「三」「首」「川」「申」「大」「手」「守(左文字)」「天」「壘?」「工」「内」「丁」「反?」等、20種類以上にも及ぶ(第17図)。文字瓦は文字によってある程度の分布域が定まっていることが知られる他、今次調査の礎石建物跡(SB01)では一点の文字瓦も確認されなかった事実から、建物によって文字瓦の使用が定まっていた可能性もあり、文字そのものの意味あいよりも瓦供給の負担分を明確にした瓦工の確認印としての刻印と推定される。



第17図 長者屋敷遺跡出土(表採)文字瓦拓影(1:2)(市教育委員会蔵)

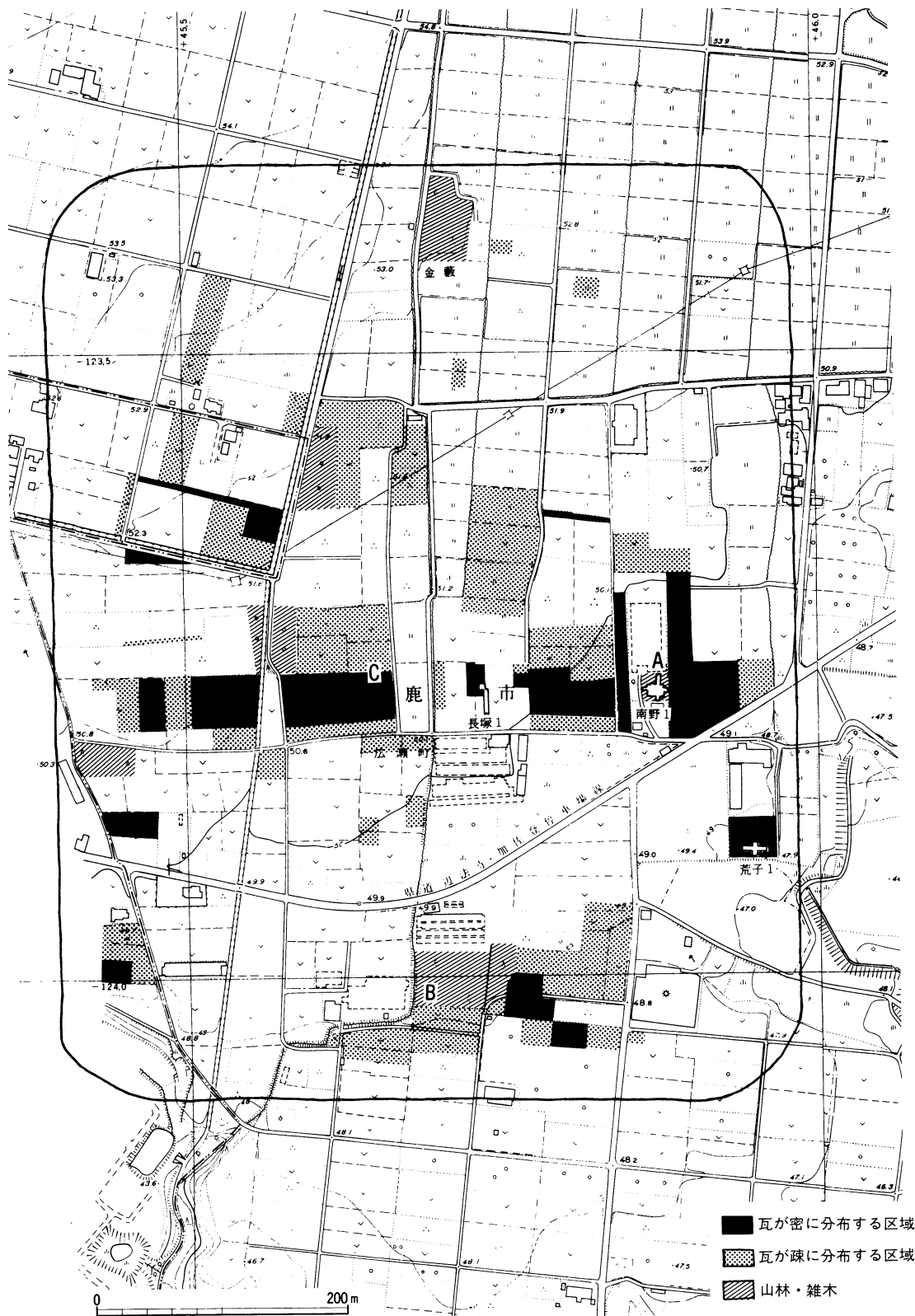
2. 検出遺構

事前の詳細分布調査から、瓦の散布状態は均一ではなく、疎密の区別があること(第18図)、また、表面観察から建物跡が容易に識別できる所が数カ所存在することが知られ、それらを手がかりとして、調査区を設定した。

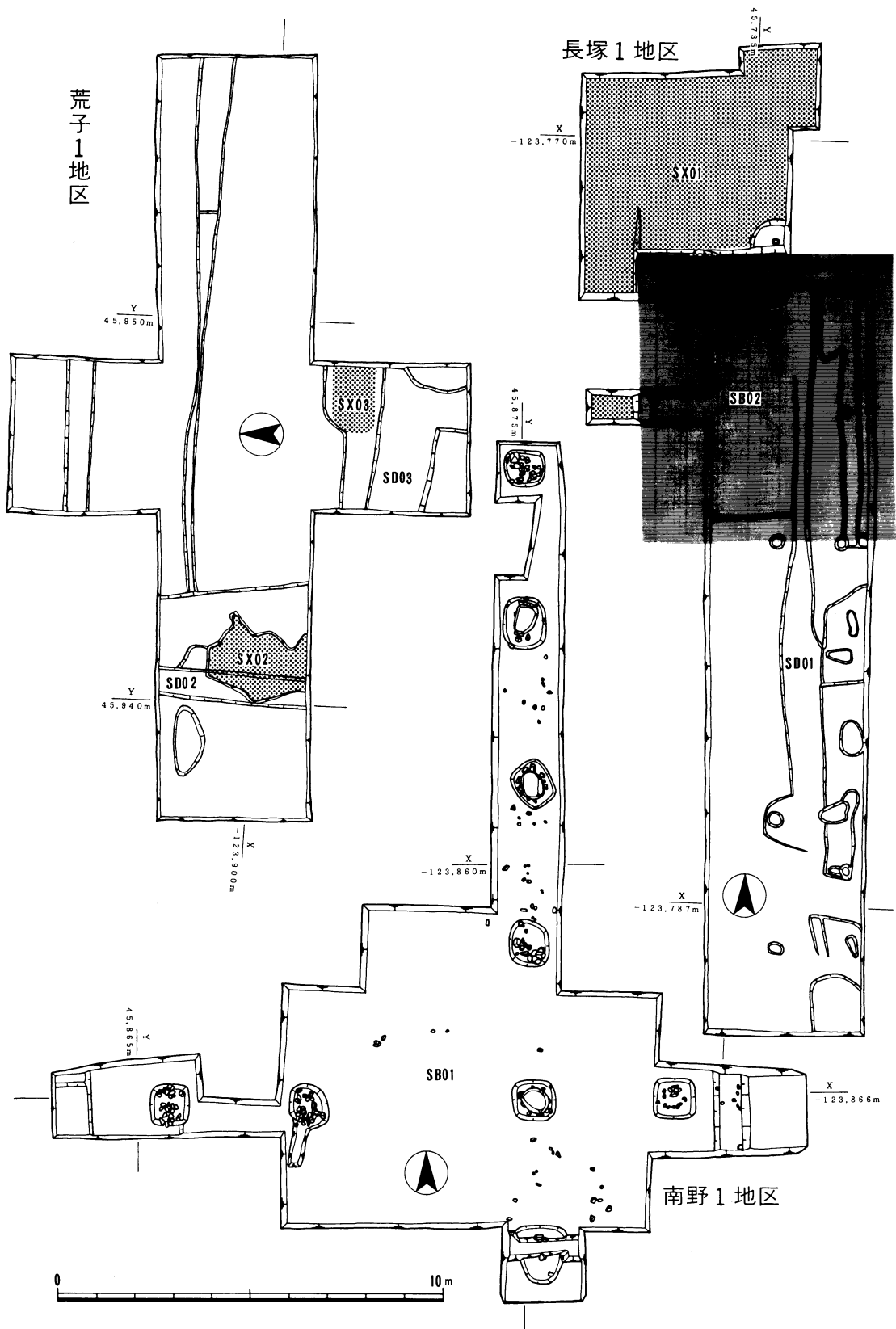
【南野1地区】

前述した藤岡謙二郎氏らの調査地点(A地点)の再調査を実施した。当時の調査資料が見あたらないため、調査概要は氏の著書「都市と交通路の歴史地理学的研究(1960)」によらざるを得ないが、当時の調査参加者(田中欣次氏)の談によれば、調査は礎石地点のみで面的な調査は行っておらず、正確な実測図も作成しなかったようである。建物基壇の西方数メートルには建物とほぼ方向を同じくする幅約4.0m、高さ約1.0mの土塁が残存する。

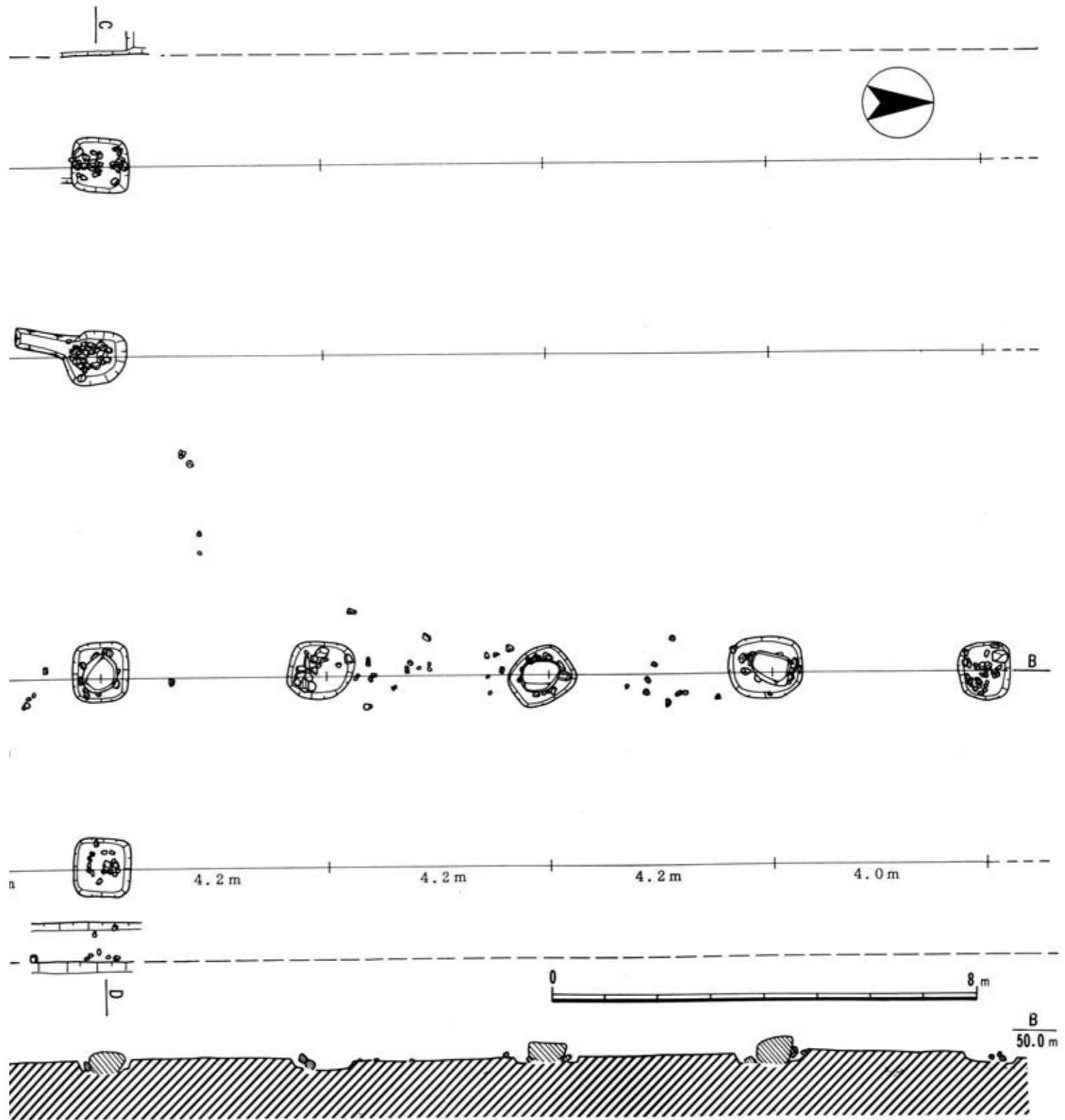
SB01 瓦葺礎石建物跡である。確認された建物の規模は東西3間×南北5間以上の南北棟である。柱間は桁行20.8m(4.0+4.2+4.2+4.2+4.2)以上、梁行13.2m(3.6+6.0+3.6)で、東西両面庇建物である。柱間は1尺=29.5～30.0cmの間で計測可能である。棟方向はN1°Wで、ほぼ真北の方向である。先の調査では南にさらに3間分の礎石跡を確認しているので(第24図)、桁行8間以上ということになるが、妻柱を確認していないので、2棟以上の分割も十分考えられる。北端の1間分の柱間がやや短いのでここで分割される可能性もある。検出礎石9箇所の内、礎石が現存していたのは3箇所、あとは栗石のみの検出である。礎石は60～80cmの自然石(花崩岩)の上面を打ち欠いて平に成形しているが、北側の2つの礎石は共に西に傾斜している。礎石掘形は1.1～1.2mの隅丸の方形を成し、栗石は10～30cmの自然石を摺鉢状に配置している。基壇は東西16.8mで、第I層・黄色粘土混入黒褐色土、第II層・黄色粘質土、第III層・黒色砂質土で、第III層(旧表土)の上面に2層の粘質土を固めて成形している。2層の基壇層は中央部では厚く(25cm)、縁辺部では薄い。第III層上面には瓦片がかなりかんでおり、この礎石建物が建て替え建物であることを示している。その建物が礎石建物か掘立柱建物であるかどうかは、第2次調査を実施していないので不明である。ただ、下層出土瓦のほとんどは礎石建物所用瓦と同一なので、それほど時間差はないものと考えられる。瓦は基壇のほぼ全面に堆積していた。出土状況は倒壊したという状態ではなく、廃棄時にその場に投棄したという状況を呈していたが、一部、屋根からそのまま降り落ちたと思われる箇所も見られた。出土瓦は丸瓦と平瓦のみで、軒瓦の出土は一点もない。廃棄時に軒瓦だけ持ちさったことも考えられるが、もともと軒瓦を使用していなかった可能性が大きい。なお、文字瓦及び土器の出土もない。



第18図 長者屋敷遺跡瓦分布図・発掘区位置図 (1:5,000)



第19図 遺構全体実測図 (1:160)



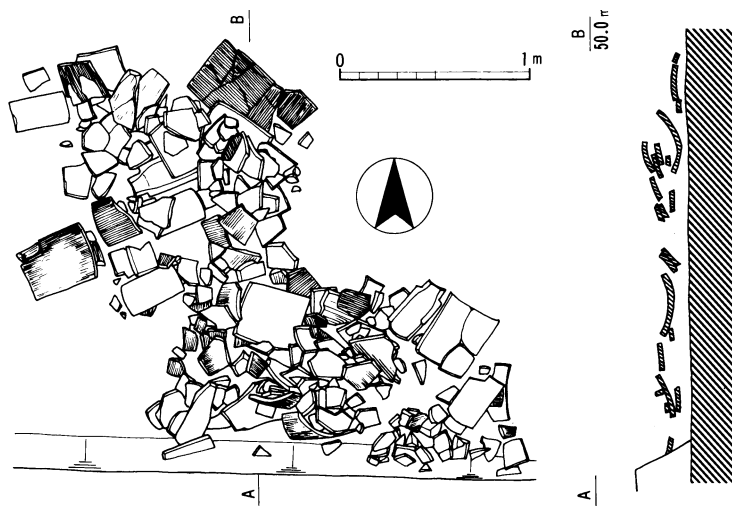
【長塚1地区】

遺跡のほぼ中央に位置しており、南野1地区からは西140mの地点にある。基本的層序は第Ⅰ層・黒灰色砂質土(耕作土)、第Ⅱ層・黒色砂質土(包含層1)、第Ⅲ層・黄褐色土混入黒色砂質土(包含層2)、第Ⅳ層・黄褐色粘質土(地山)で、地表より地山面まで約50cmである。

SB02、SX01 建物規模及び礎石建物、掘立柱建物の何れかも不明であるが、建物跡であるとした根拠は以下の通りである。最初設定した調査区内では、殆ど遺構及び遺物は発見されなかったが、北側で幅約60cmの東西の土堤状遺構と、その内面(南側)に明かに故意に埋め込んだ黄褐色土混入黒灰色粘質土層を確認したため、さらに北側を拡張した。その結果、土堤状遺構は西で南方向に屈曲することが確認された他、ほぼ全面にわたり、3~5cm前後の小石を敷き詰めた砂利敷遺構(SX01)が検出された。その上部には瓦も散乱していたが、特に西側に多く堆積していた。従ってこの土堤状の遺構は建物基壇を成形する際の周堤と考えられ、その周囲に砂利を敷いたものと考えられる。基壇はその後の削平によってその殆どを失い、礎石建物か掘立柱建物かは不明なままとなった。

【荒子1地区】

遺跡の南東端に位置する。すぐ南側は谷が入り込み(現在は埋め立てられ運動場になっている)、西約50mにも深い谷が入り込んでいる。調査前の状況は畑地でかなりの瓦の散布が確認されており、何らかの建物跡の検出が期待された。基本的層序は第Ⅰ層・瓦混入黒色砂質土(耕作土)、第Ⅱ層黄褐色土混入黒色砂質土、第Ⅲ層・黄褐色粘質土(地山)で、地山上面まで約50cmである。瓦は第Ⅰ層にその殆どが含まれ(土嚢袋にして約30袋)、第Ⅱ層には殆んど含まれていなかった。検出した遺構は瓦溜り遺構2基と溝、土堤状の遺構である。北、西、南の土堤状の遺構を囲む一郭(東西18m以上×南北8m)は長塚1地区の例から建物跡の可能性もあろう。



第21図 南野1地区西南隅瓦出土状況(1:40)

SX02、SX03 瓦集積遺構で、調査区の西(SX02)と南(SX03)で検出した。SX02は東西2.0m、南北2.6m以上で、さらに南側に続いている。全体に瓦はかなり風化しており、瓦年代よりかなり後になって投棄されたものと考えられる。SX03は東西1.8m以上、南北1.2mで、さらに東側に続いているものと思われる。表土約20cmで検出され、約20cmの厚さで堆積しており、投棄された状況下である。

SD02、SD03 SD02はSX02の西側下層で検出された南北溝で、幅0.8m、深さは検出面より約20cmを測る。小石、瓦がかなり混入しているが、時期は不明。SD03はSX03の南側で検出された東西溝で、幅1.5m、深さは検出面より約30cmで、南に屈曲している。土堤状遺構が建物跡であるとすれば、この両溝は建物に伴う周溝と推定されよう。

3. 出土遺物 (図版22・23)

出土遺物の大半は瓦類で、特に南野1地区からは土嚢袋にして約350袋の瓦の出土をみた。

〈土器類〉 49, 50; SX01

土器類の出土は極めて少量で、長塚1地区から須恵器、土師器、荒子1地区からは、縄文時代石斧1点、土師器片が出土したのみで、南野1地区からは1点の土器の出土もない。**須恵器蓋**(49、50) 両土器共、長塚1地区の砂利敷遺構(SX01)直上の西端で発見された。49は推定口径134mm、天井部へう削りで、口縁端部は下方に細く終わる。50は偏平な擬宝珠つまみを有する蓋で、口径164mm、器高30mm、天井部へう削り成形で、端部は下方に屈曲し、丸く収まる。緻密な胎土でセピヤ色を呈する。

〈瓦類〉

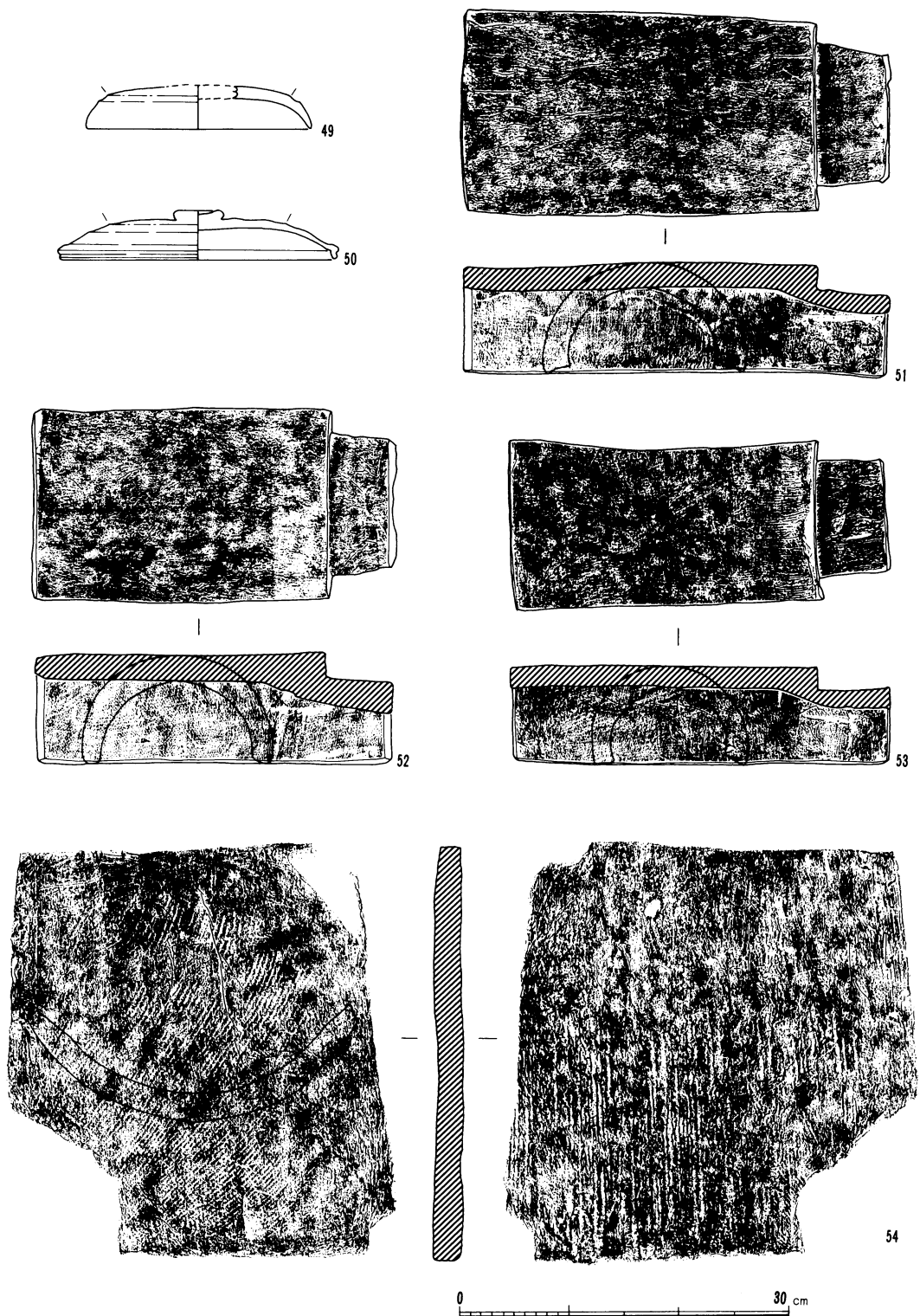
丸瓦及び平瓦のみで、軒瓦、道具瓦、文字瓦等は一点も確認されなかった。

1. 丸瓦 51、52; SB01、53; SX01、

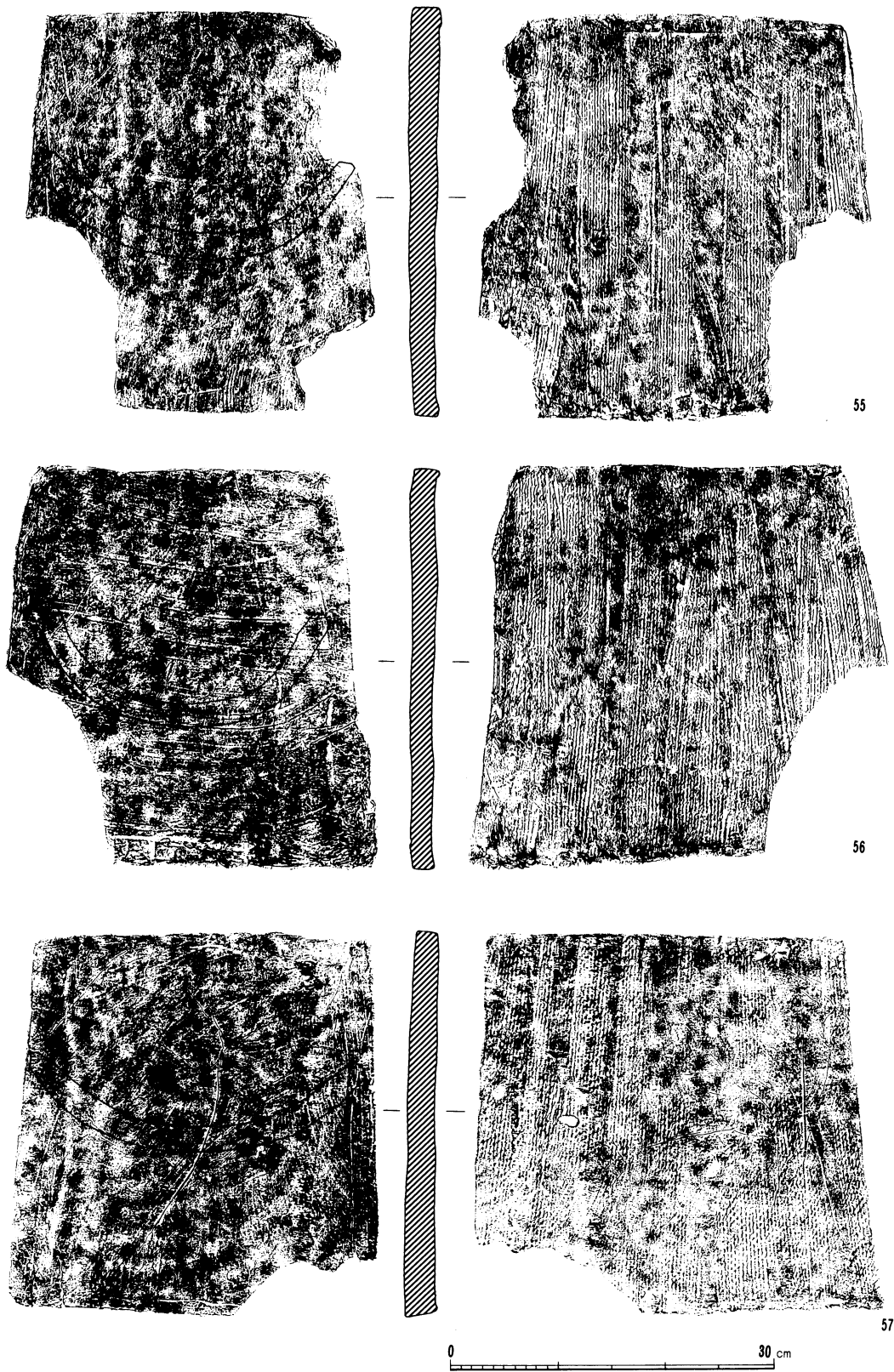
すべて玉縁式丸瓦である。成形技法は同一で、凸面は縄文タタキの後、丁寧なナデあるいはへう削り成形。凹面は糸切り痕の後、布目痕のみ。半戴される際の内面の刃物痕跡は約1/2で、残りの切断分割痕が未調整のままのものが殆どであるが、希にへうにより削り取られているものもある。丸瓦は大きさの異なる2種類が認められる。51は全長383mmで、本体部は最大幅185mm、高さ100mm、玉縁部は最大幅130mm、高さ75mmを計測する。この大きな丸瓦は量的には少ない。52は全長325mm、本体部は最大幅175mm、高さ100mm、玉縁部は最大幅130mm、高さ75mmを計測する。53は52と同種であるが、やや幅が狭く(155mm)、凸面の縄目タタキ痕が明瞭である。1~2mm砂粒を少量含み白濁色を呈する。

2. 平瓦 54、55、57；SB01、56；SX02、

全体に大振りで、曲率の大きいものが多い。一・枚作りにより制作されているが、凸面は全体に側縁に沿った荒い縄目タタキ成形によって施される。凹面は糸切りの後、布目痕が見られるが、未調整のままのもの(54)と全面に丁寧な横方向のへら削りが施されるもの(55)が見られる。中には荒い横方向へら削りを施すもの(56)や、ランダムにへら削りを施すもの(57)もある。何れも凹面の両側縁及び狭側端の3方向に浅い面取りを施す。56で全長350mm、側端上弦幅263mm～320mmを計測する。何れも焼成は良好で、黒灰色ないし白灰色を呈する。



第22図 土器・丸瓦・平瓦実測図（1：6、ただし49、50は1：4）



第23図 平瓦実測図 (1 : 6)

V. 小結

1. 大鹿山6号墳について

大鹿山6号墳は：横穴式石室を内部構造とする推定径1.5m前後の円墳である。築造時期は副葬された須恵器で判断したい。須恵器杯蓋A類は口径がやや小さく、やや扁平となり、成形技法的に天井部が回転ヘラ切り未調整であることから中村編年Ⅱ型式5段階に位置づけられる。杯蓋B類は製品自体が小形化し、つまみは細くて長い宝珠つまみで、天井部の1/2がヘラ削り成形、内面の長いかえりは蓋の口縁端部より下方にのびていることから中村編年Ⅲ型式1段階に位置づけられよう。従って大鹿山6号墳は6世紀末に築造され、7世紀前半に追葬を受けているものと判断する。

鈴鹿川流域における横穴式石室の受容は井田川茶臼山古墳が初現とされ、概ねMT15型式の時期に比定される。箱式石棺2基と画文帯神獣鏡2面を始めとする豊富な副葬品の数々はこの地方の首長墓としては卓越している。石室は玄室に胴張りを有する両袖式石室で、竪穴系横口式石室の影響を受けているとの指摘もある。これに続く石室は太岡寺4号墳や正知浦2号墳でTK10型式の時期に当てられる。北勢地方の横穴式石室は、6世紀後半より漸次築造されるが、その平面形態は様々である。片袖式形態、無袖胴張り式形態は早くから認められるが、6世紀末より四日市市方面を中心に複室式形態の石室が増加する。八幡古墳、狐塚1号墳、和田ヶ平1号墳、御池古墳群などが複室式石室として確認されている。大鹿山6号墳の複室式石室は鈴鹿川流域としては初見で、八幡古墳とほぼ同時期と考えられ、複室式石室の伝播を考える上で貴重な発見となった。

2. 伊勢国分尼寺及び前身寺院について

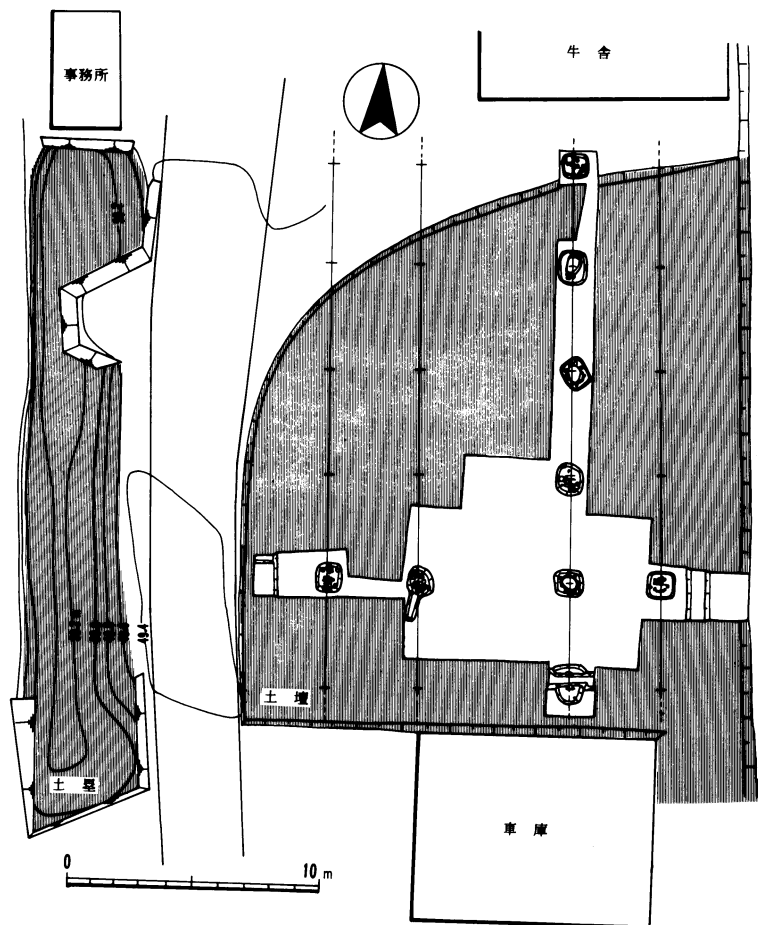
前報告書でも記述したように、江戸期の文献(国分寺陳跡碑記)には、伊勢国分寺として「北院(尼寺)」と「南院(僧寺)」の2箇寺の存在が記されており、それぞれに古瓦が出土する。これまで3年次にわたり「伊勢国分尼寺推定地」として「南院」の地の調査を進めてきた。その結果、掘立柱建物跡4棟と東築地跡の遺構を確認した他、多数の瓦類の出土を見た。また、寺院に伴うと考えられる整地層を確認したが、堂塔の発見は無く、遺構の残存状態から、既に削平されている可能性もあろう。今年度行われた集落排水路施工に伴う事前調査では西側には東築地に対応する築地は確認されなかった。しかし、瓦を含む包含層の切れ目が確認され、それを寺院の西端と仮定すれば、寺域は東西9.5m前後の範囲になる。北側、南側も築地等は確認されていないが、南は南浦4地区SD43が寺院の南端を区切る溝の可能性が高く、北も南浦5地区SX07以北では殆ど瓦の出土がないことから北端もこの付近と推定され、南北約110m前後の寺域の推定が可能となった(第6図)。

さて、この寺院の存続時期については出土軒瓦と土器により考察せざるを得ない。軒丸瓦Ⅱ型式と軒平瓦IB型式はその出土量から言っても創建瓦と推測され、軒丸瓦ⅤⅢ型式

の関わりの中で論じられてきた。氏によれば、「令義解」の『関市令』『軍防令』を根拠に三関の第一に置かれる鈴鹿関に軍団が置かれたのは当然のことであり、鈴鹿関の近くに置かれたであろう兵士の寄宿、屯田の場所＝軍団がこの長者屋敷遺跡の地に営われたという。鈴鹿関は現在の鈴鹿郡関町の旧宿場町地区に置かれたと推定され、長者屋敷遺跡より西南西約10kmの位置にある。しかし、軍団が鈴鹿関（あるいは三関）に設置されたという具体的な記述は無く、軍団としては僅かながら白河軍団跡と推定されている関和久上町遺跡が調査されているが、決定的な遺構・遺物は未だ発見されていない。不破関及び愛発関に関しても何等軍団と結びつける遺跡は無く、今後、長者屋敷遺跡の調査が進んでもおそらく軍団跡と直接的に結び付く遺構の発見は期待できないものと思われる。むしろ長者屋敷遺跡を創置あるいは二次の伊勢国庁跡と推定したほうがより自然である。また、広大な遺跡は駅家や国司館等、他の官衙域を含む可能性もあろう。

伊勢国府の所在地については、従来より鈴鹿市国府町地内に比定されてきた。それは土塁の残存と、「国府」「長(庁)ノ城」「西城戸」「北一色」等の地名、総社＝三宅神社から藤岡謙二郎氏は「長ノ城」を政庁域とした方八町の国府域を想定した(第15図)。

1955年、この推定国府域の一部を発掘調査を行った結果、「長ノ城」地区と三宅神社周辺で平安期と思われる古瓦と土師器、須恵器を相当数発見した。しかし、「長ノ城」地区は中世の「国府城」であり、周辺の土塁も城館に伴うものと考えられること、また、1991年には推定国府域に含まれる「高畦」「西木曾田」地区で発掘調査が行われたが、国府プランに関わる奈良、平安期の遺構、遺物は全く検出されなかったことから、方八町域そのものが疑問視されるに至った。最近の各地の国府跡の発掘調査の成果から、国府域は必ず



第25図 S B01、土塁位置関係図 (1:300)

しも「方八町」「方六町」などの方形地割プランをもたないこと、また、国府(国庁)は時代によって各地に移転することが明らかにされている。従って伊勢国府の所在地も何等「国府」地区に固執することはなく、奈良期に長者屋敷遺跡に国府が置かれていたのが、平安期に至り、何等かの理由によって鈴鹿川対岸の「国府」地区に国府が移転したと考える方がより自然である。藤岡氏は「国府」地区を奈良期より移転しない伊勢国府跡と推定したため、長者屋敷遺跡を他の官衙として、鈴鹿関の軍団と結びつけたものである。

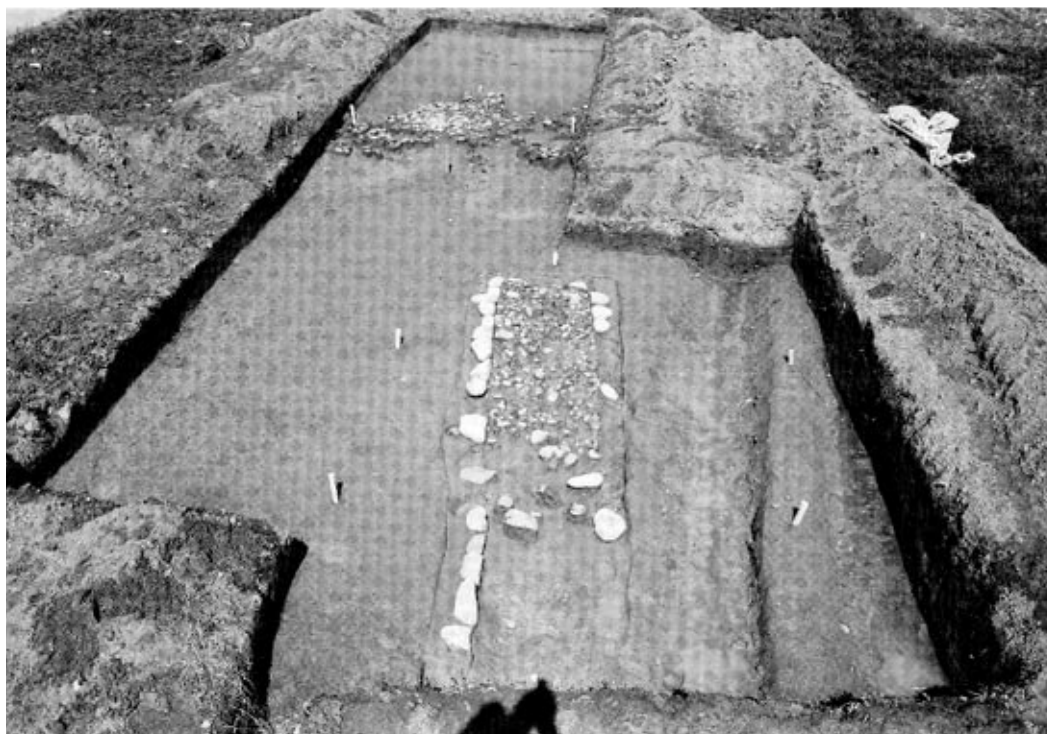
長者屋敷遺跡の調査・研究は今第一歩をふみ出したところである。今後調査が進む中で、規模や性格が次第に明らかにされてくるものと期待する。なお政庁域としては、位置的にも軒瓦の出土するC地点(第18図)が有力候補地として考えられるが、遺跡南端中央のB地点の可能性もあろう。

※参考及び引用文献

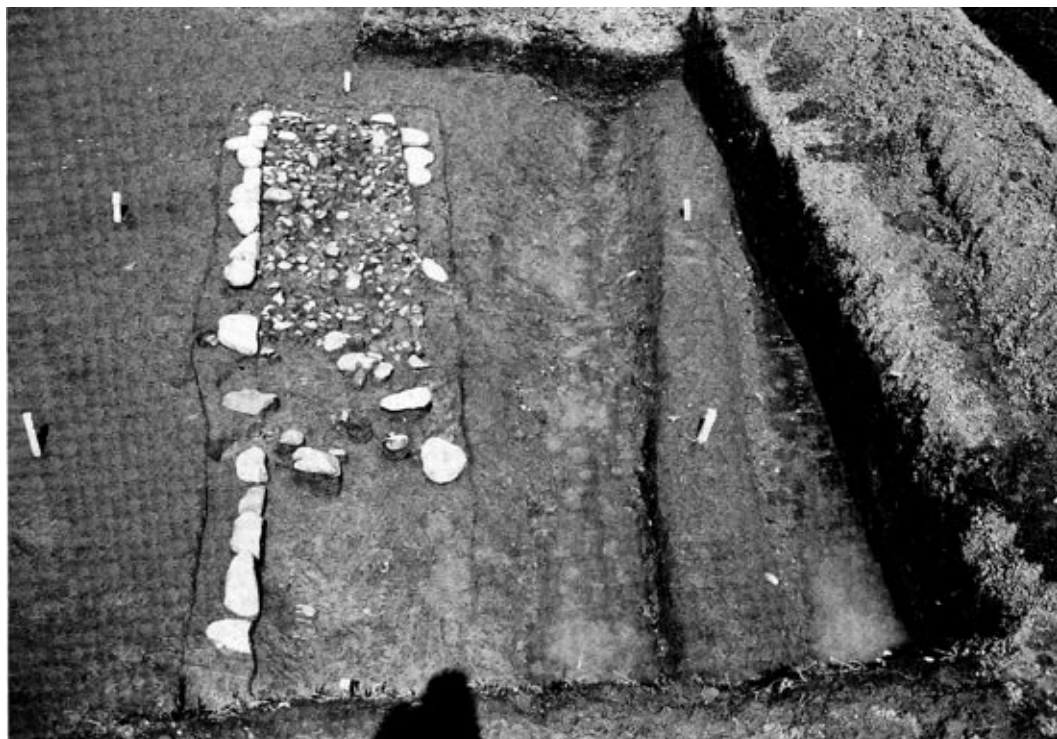
1. 鈴木敏雄「三重縣古瓦図録」1933
2. 大西源一「伊勢の國司及び國府について」『鈴鹿(第2号)』亀山高等学校1953
3. 藤岡謙二郎「国府の歴史地理学的研究(抄報)」1958
4. 藤岡謙二郎「都市と交通路の歴史地理学的研究」大明堂1960
5. 真田幸成「鈴鹿市の古瓦」『神戸史談(5号)』神戸高等学校郷土史研究クラブ1965
6. 藤岡謙二郎「国府(日本歴史叢書25)」吉川弘文館1969
7. 桑原公徳「鈴鹿川流域の古代遺跡」『地形図に歴史を読む(第二集)』大明堂1970
8. (財)栃木県文化振興事業団「下野国府跡(1~IX)」1979~1990
9. 阿部儀平、他「古代国府の研究」『研究報告第10集』国立歴史民俗博物館1986
10. 阿部儀平、他「古代国府の研究(続)」『研究報告第20集』国立歴史民俗博物館1989
11. 木下良「国府」教育社1988
12. 仲見秀雄、他「鈴鹿市史第1巻」鈴鹿市教育委員会1980
13. 山中敏史、佐:藤興治「古代の役所」岩波書店1985
14. 八賀晋「伊勢国鈴鹿関に関する基礎的研究研究成果報告書」1992
15. 森川幸雄「鈴鹿郡関町出土古瓦」『Mie History(Vol. 4)』三重歴史研究会1992
16. 村山邦彦「鈴鹿市広瀬長者屋敷遺跡の研究」『古代学研究(第128号)』1992



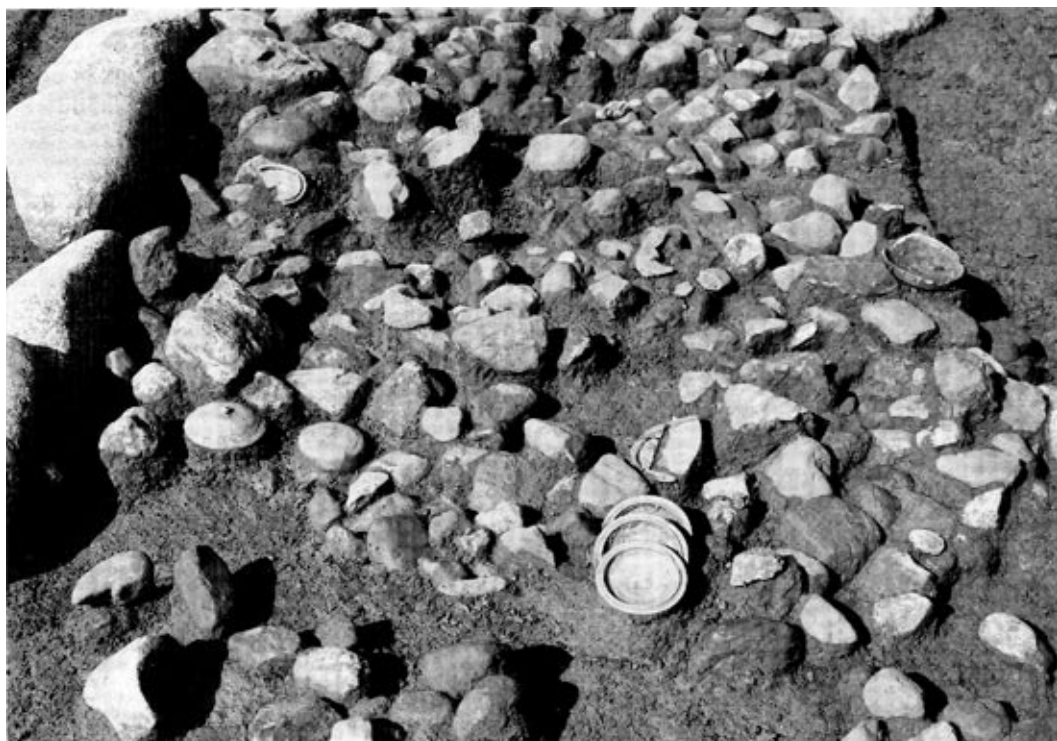
大鹿廃寺全景（南より）



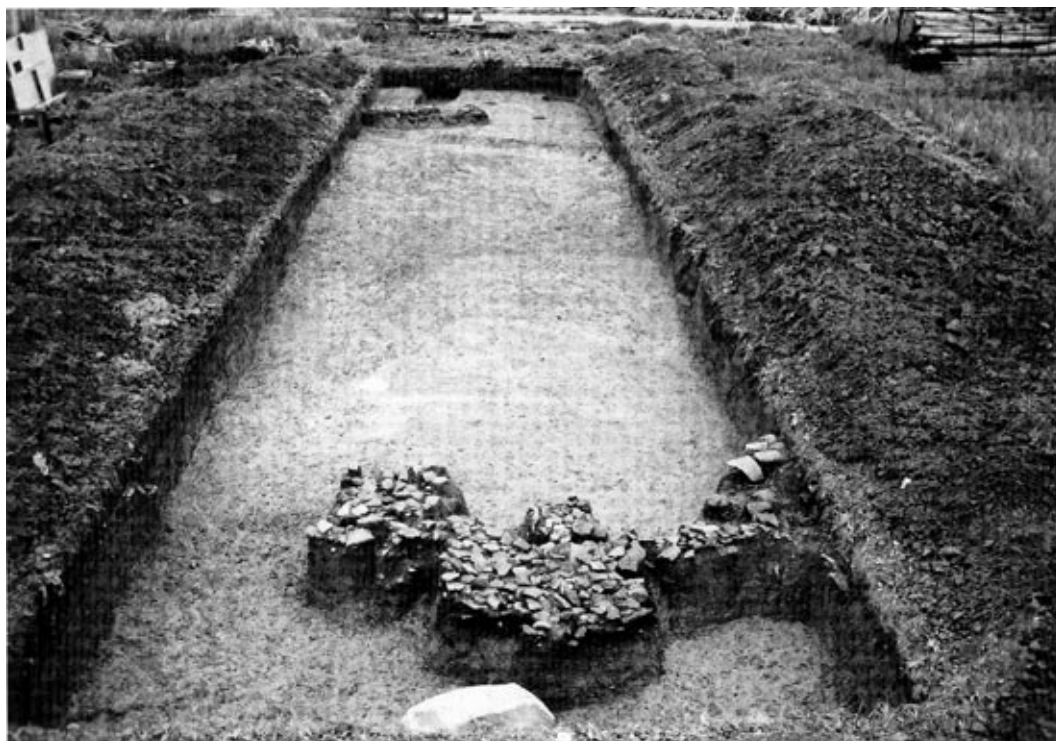
南浦5地区全景（南より）



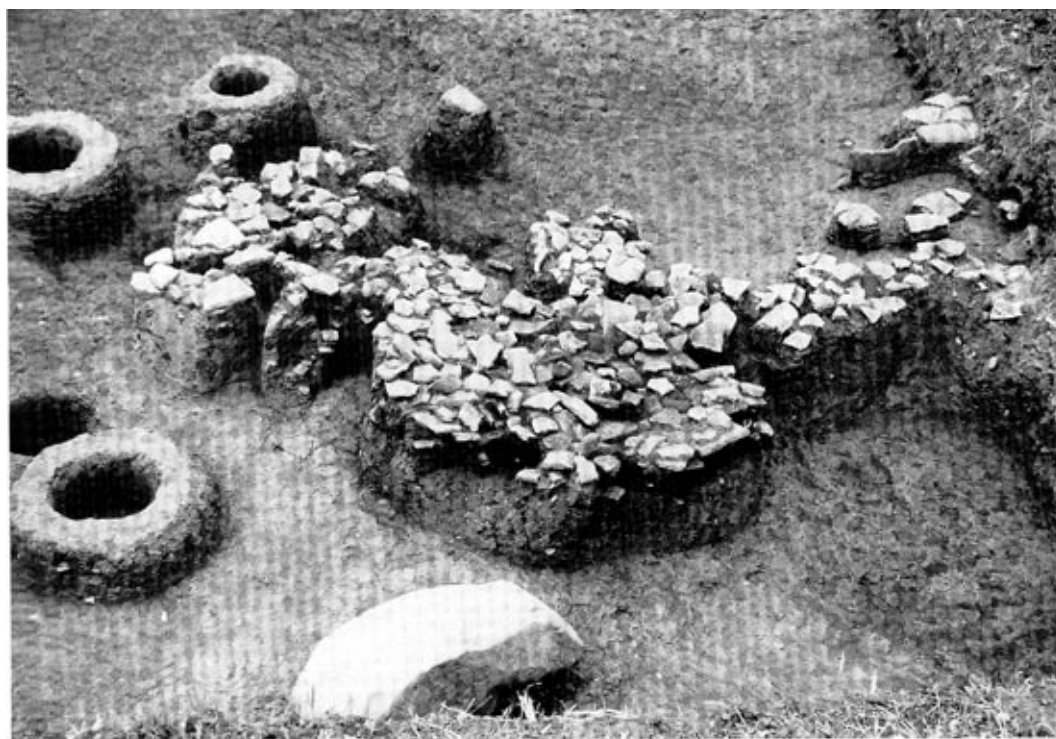
大鹿山6号墳石室全景（南より）



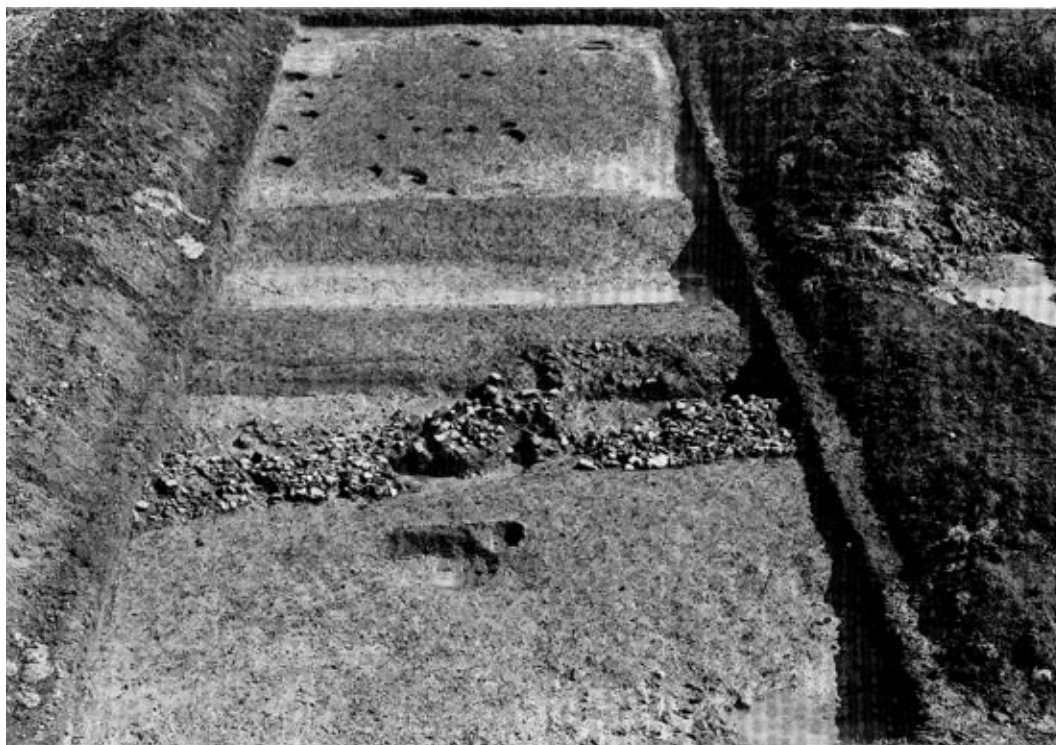
石室遺物出土状況（南より）



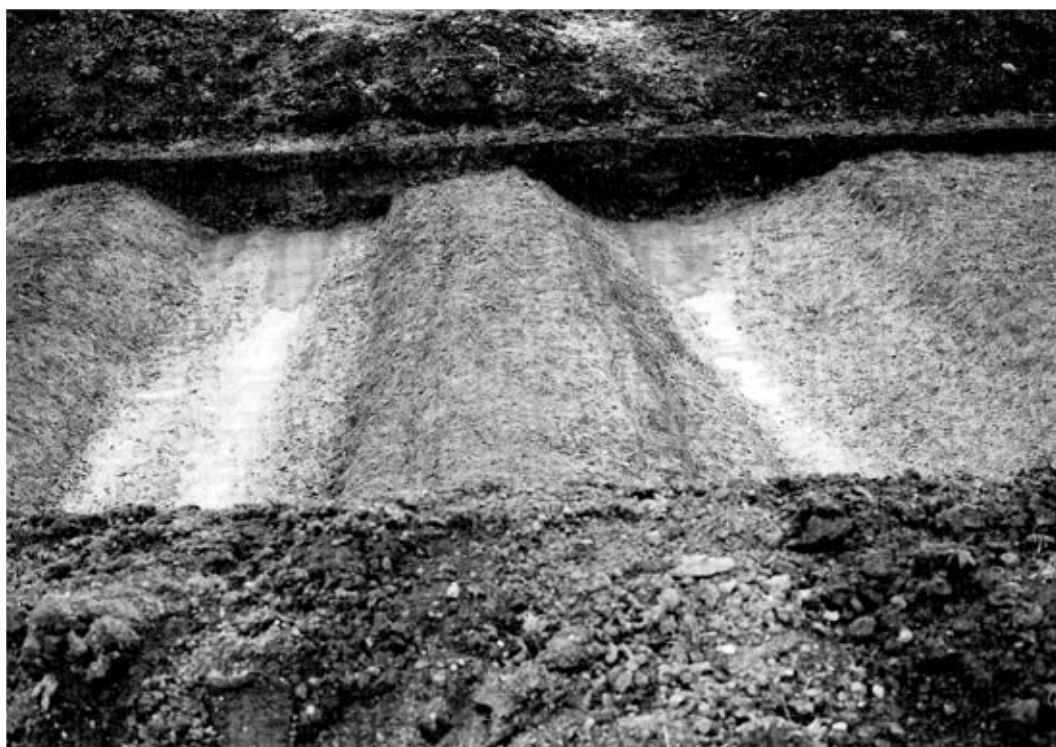
南浦6地区全景（東より）



南浦6地区SX08（東より）



谷上1地区全景（西より）



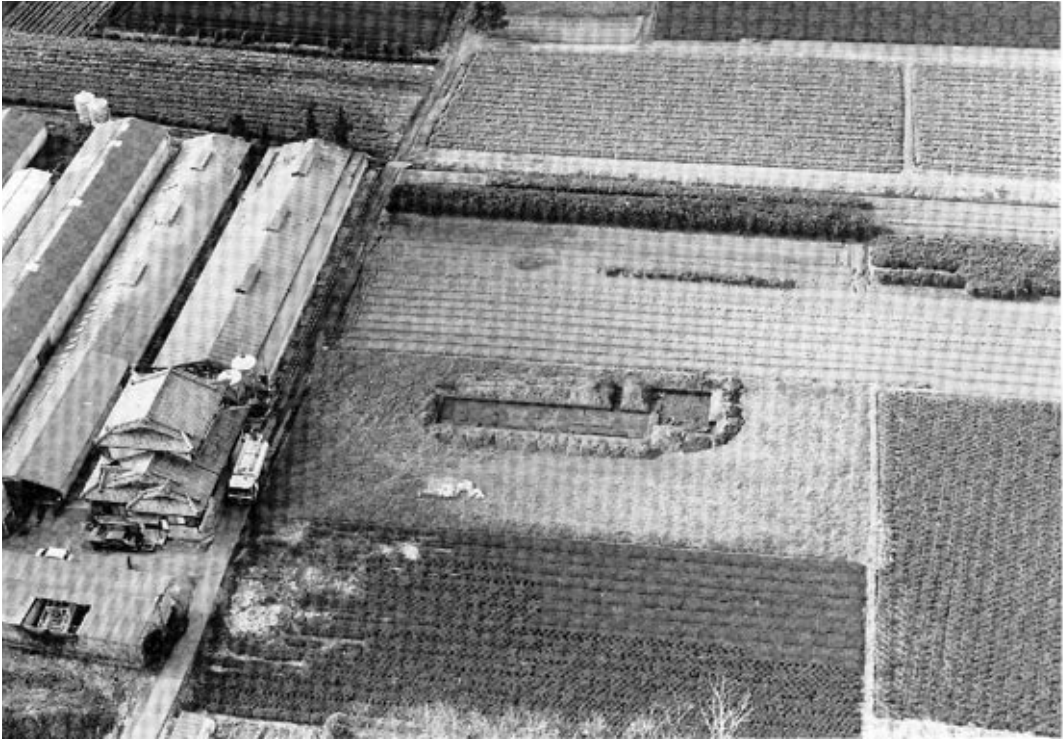
谷上1地区 SA - E, SD50・51（北より）



長者屋敷遺跡全景（南より）



南野1地区付近（東南より）



長塚 1 地区付近 (東より)



荒子 1 地区付近 (南より)



南野 1 地区 SB01(南より)



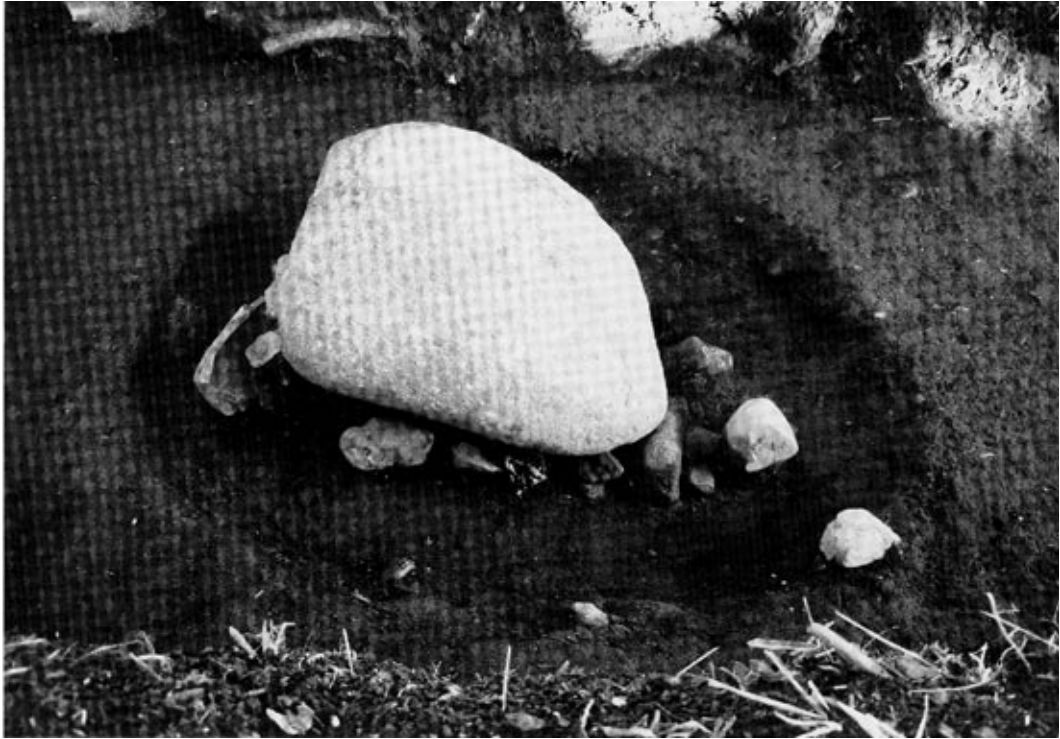
南野 1 地区 SB01(東より)



南野 1 地区 SB01(西より)



南野 1 地区南西隅瓦出土状況(北より)



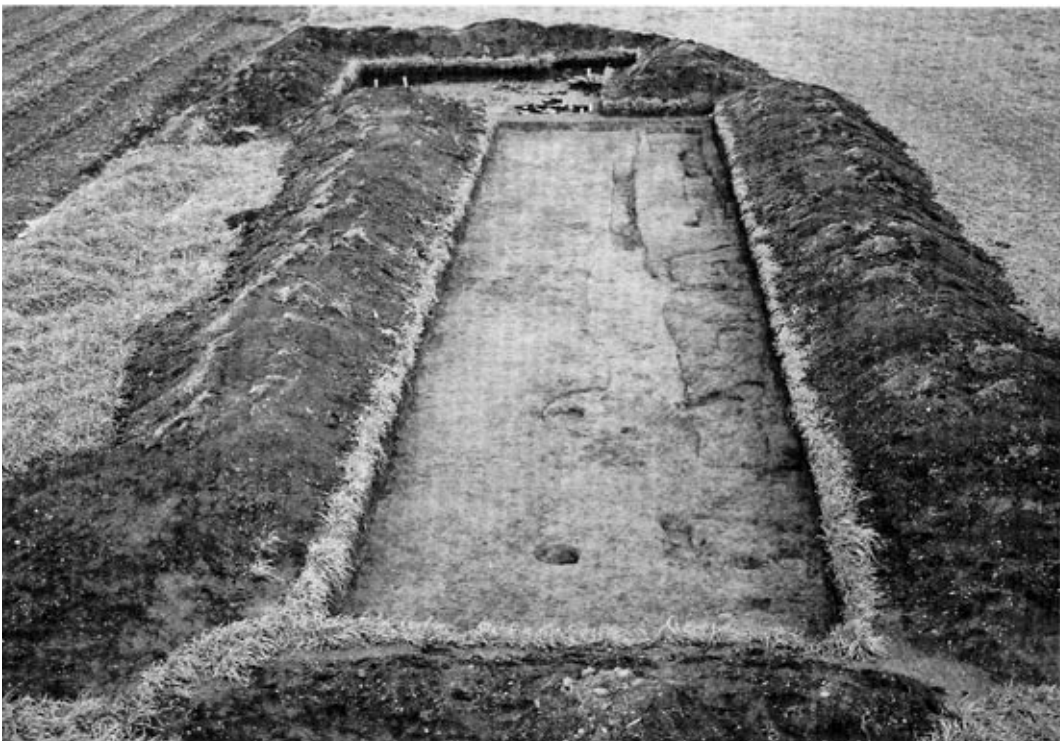
南野1地区SB01 礎石(北端)近景(西より)



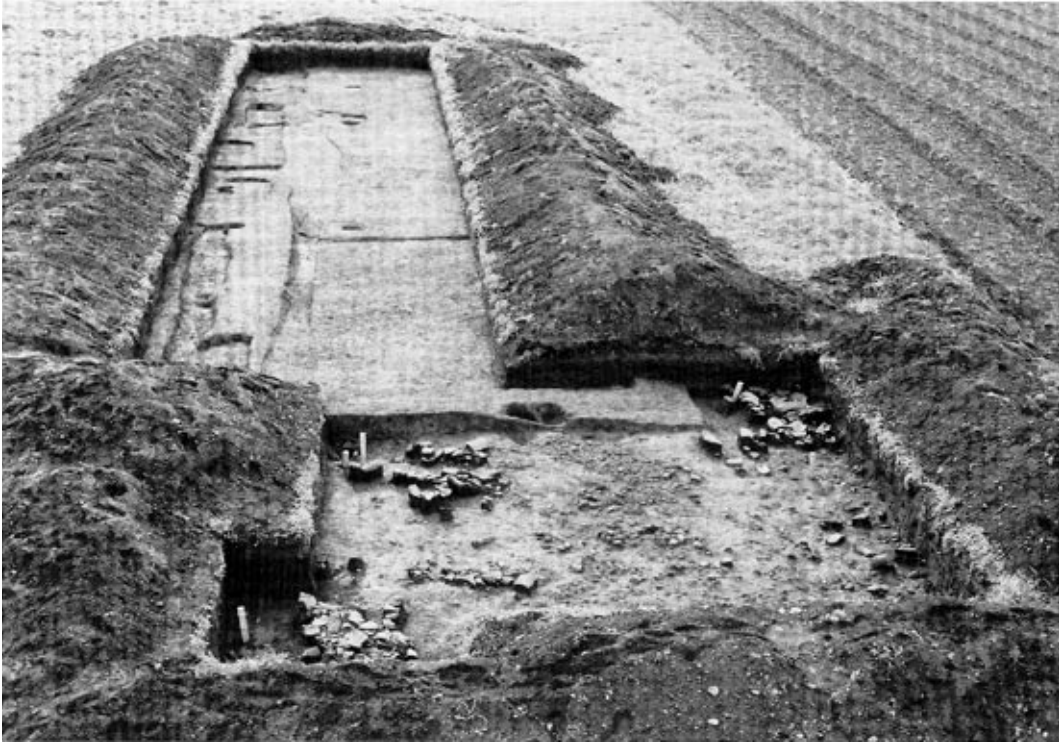
南野1地区調査風景(東より)



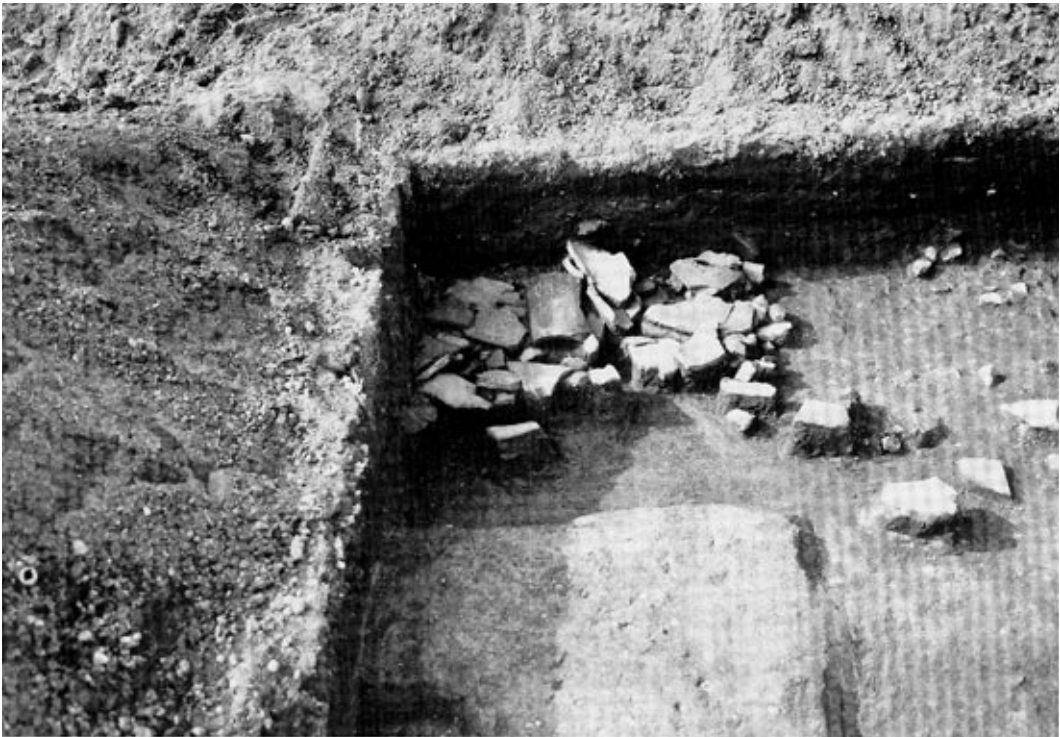
南野 1 地区土塁 (南より)



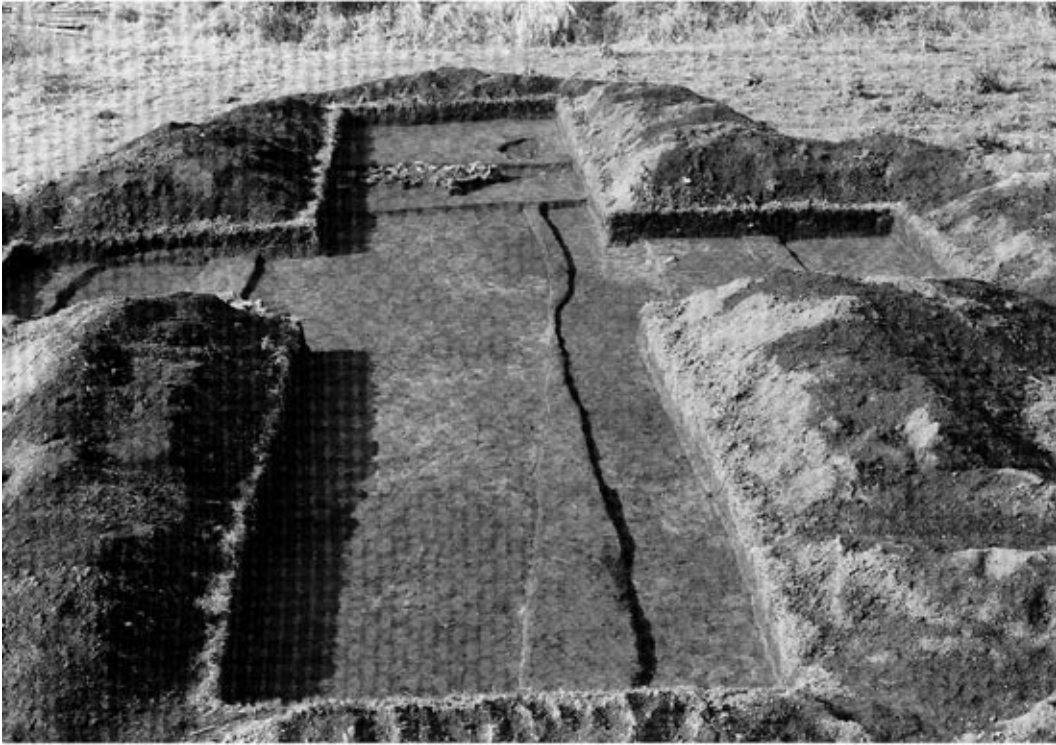
長塚 1 地区全景 (南より)



長塚1地区全景(北より)



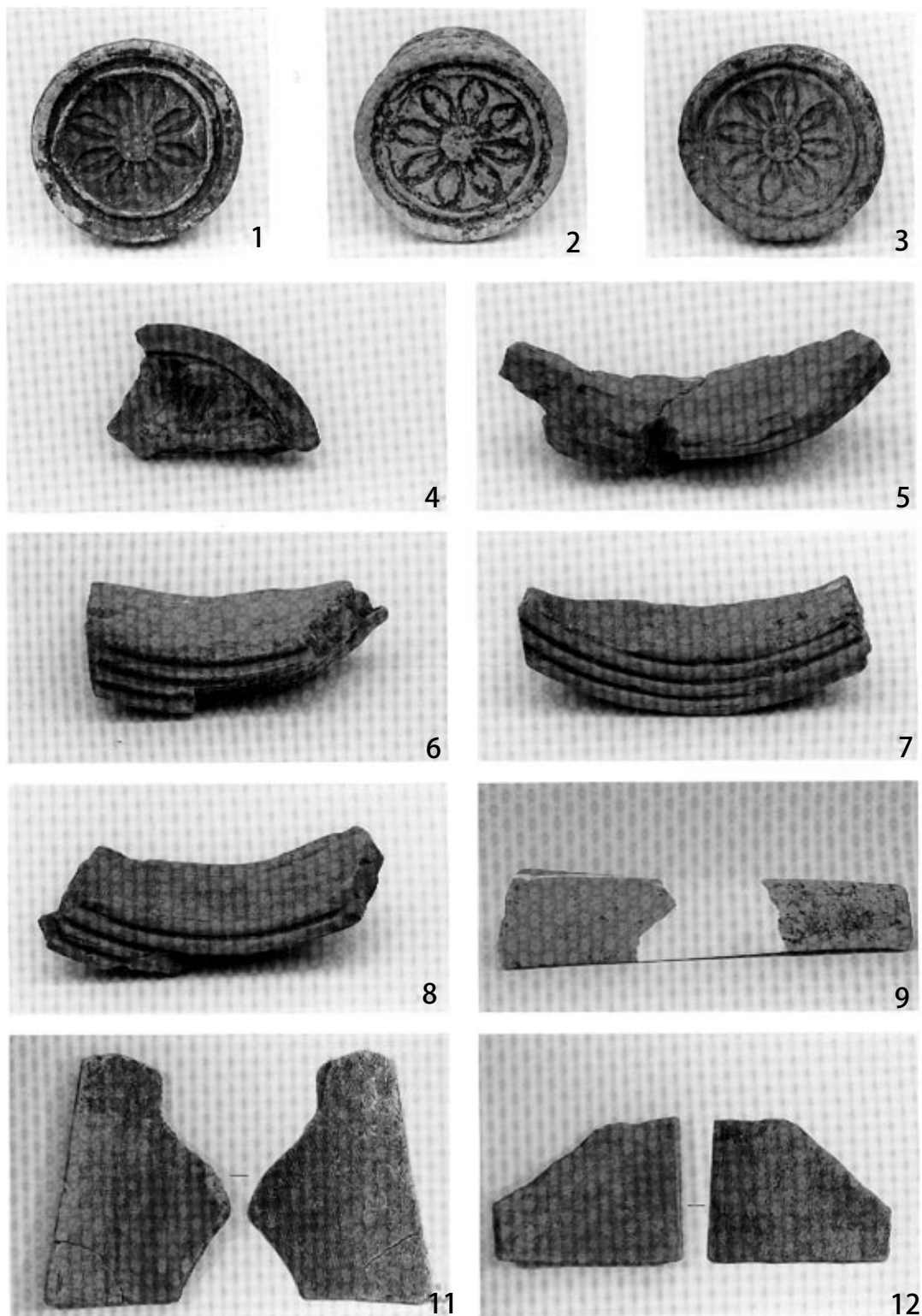
長塚1地区S X 0 1瓦出土状況(東より)



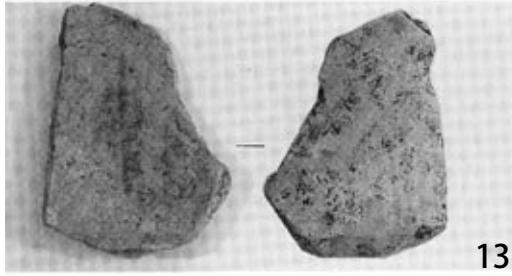
荒子1地区全景(東より)



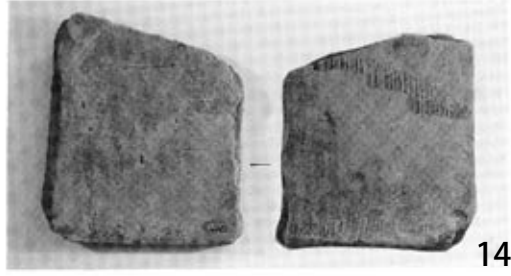
荒子1地区KSSX02(北より)



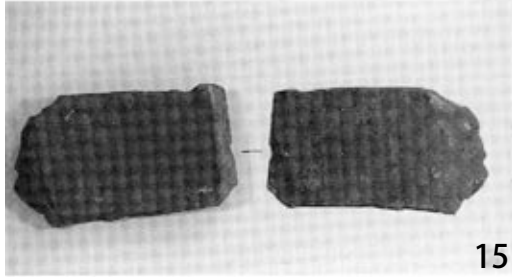
伊勢国分寺跡出土遺物 1



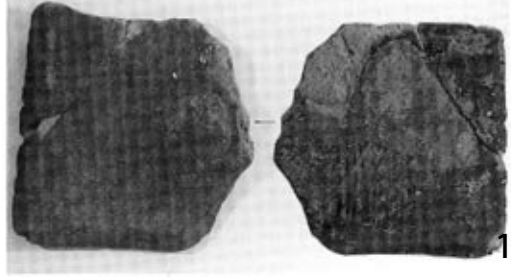
13



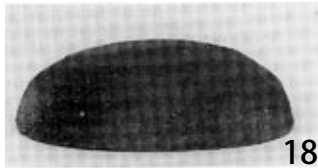
14



15



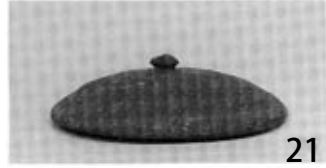
16



18



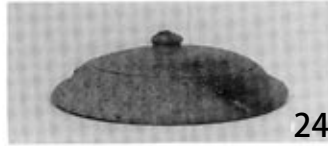
19



21



23



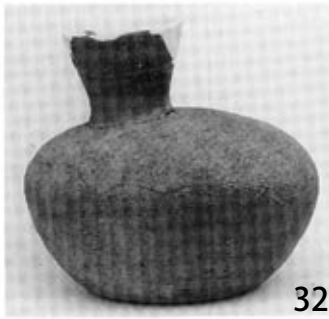
24



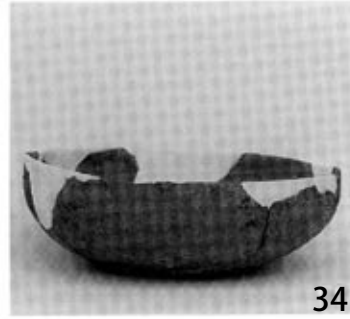
29



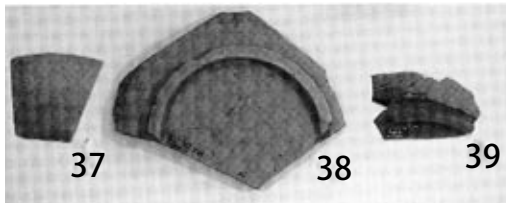
30



32



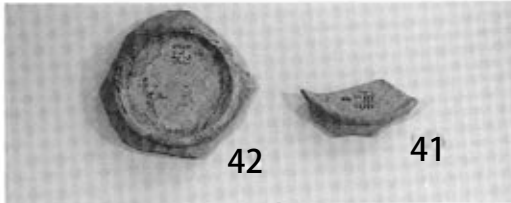
34



37

38

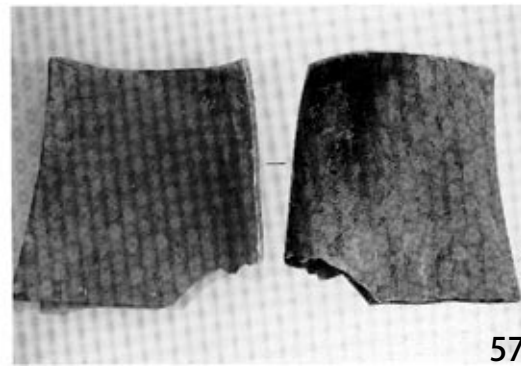
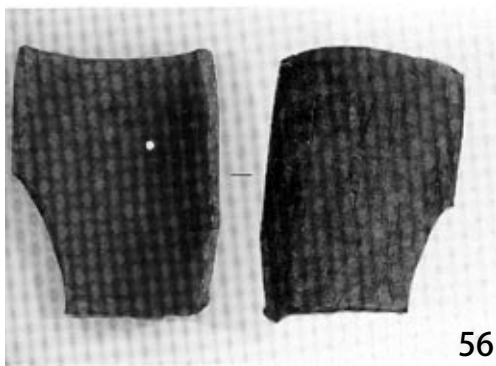
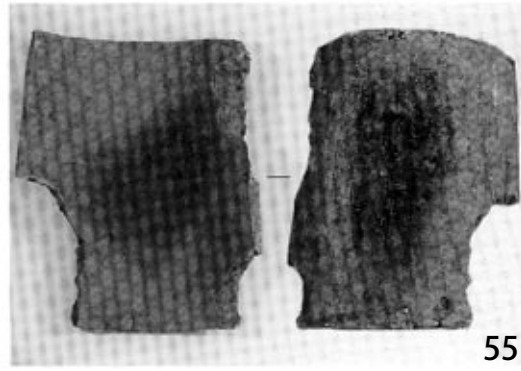
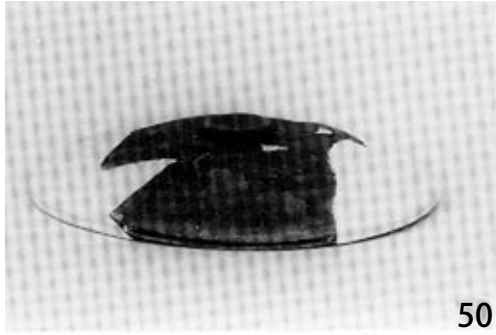
39



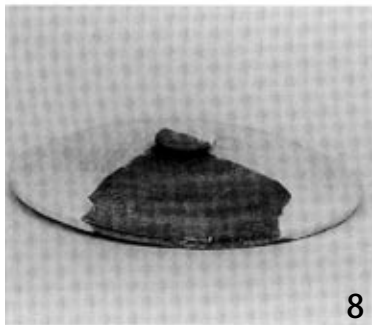
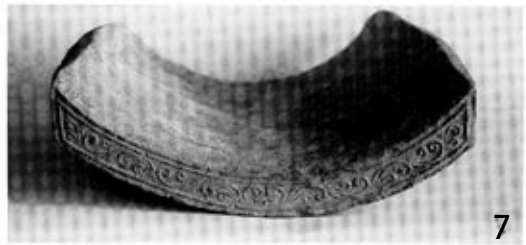
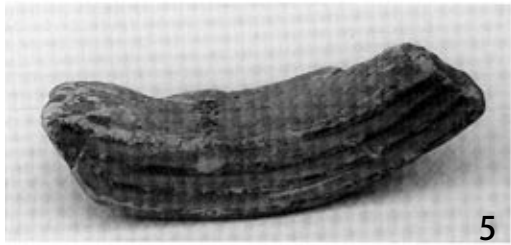
42

41

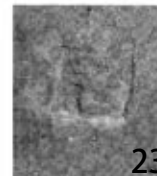
伊勢国分寺跡出土遺物 2



長者屋敷遺跡出土遺物



天王屋敷遺跡



伊勢国分寺跡

長者屋敷遺跡, その他遺跡古瓦 (番号は図版3及び16・17と対応)

**伊勢国分寺(5次)・長者屋敷遺跡(1次)
発掘調査概要報告**

1993年3月31日

編集・発行 鈴鹿市教育委員会

鈴鹿市神戸1-18-18

T E L. 0593 (82) 1100 (代)

印 刷 オリエンタル印刷株式会社

安芸郡河芸町上野2100